青森市埋蔵文化財調査報告書　第89集

篠原遺跡発掘調査報告書

― 県営本郷地区ふるさと農道緊急整備事業に係る緊急発掘調査報告 ―

平成17年度

青森市教育委員会　浪岡教育事務所

序

今年度青森市浪岡地区において浪岡教育事務所が実施した篠原遺跡の発掘調査は、「本郷地区ふるさと農道緊急整備事業」に係る緊急発掘調査の３ヵ年目にあたります。

初年度の平成14年に行われた中屋敷遺跡発掘調査では、東北南部で見られる特徴を顕著に表す、縄文時代後期後半の土器が出土しました。２年目の平成16年に行われた吉内遺跡発掘調査では、古代の住居跡から鐔と考えられる純銅製品などが出土し、西日本との交流を窺うことのできる資料として大いに話題となりました。

そして今年度の篠原遺跡の調査をもって、今回の農道敷設に係る緊急調査は完了の運びとなります。前回までの２遺跡は農道を新設するものであったことから、遺跡範囲の農道予定地を全面調査しましたが、今回の農道計画は現道路部分の拡幅を主とし、ほとんどの箇所で遺構に影響の出ない範囲での道路整備工事であることから、遺構を削平する可能性の高い拡幅部分のみ記録保存のため発掘調査を行いました。

これら３ヵ年の調査成果は、東北縦貫自動車道建設に伴なう調査以降、さほど発掘調査が行われたことのない浪岡地区東側丘陵地の歴史的な展開だけでなく、東北地方における文化の波及や様相を明らかにする一助となったものと考えております。

今後も青森市は史跡の環境整備や公有化をはじめ、諸発掘調査、文化財の保護・保存などを進めてまいる所存です。関係各位に於かれましては、旧に倍してのお力添えをお願い申し上げます。

最後に、ご指導・ご協力を賜りました皆様に記して感謝の意を表するものであります。

平成18年３月

青森市教育委員会

教育長　角　田　詮二郎

例　　言

1　本書は、平成 17 年度に青森市教育委員会浪岡教育事務所が実施した、県営本郷地区ふるさと農道緊急整備事業に係る緊急発掘調査報告書である。

2　本書の編集並びに執筆は木村浩一・竹ヶ原亜希が担当し、第 6 章については、昨年度の本農道工事に伴なう調査員の成田誠治氏からいただいた玉稿を掲載した。

3　本報告書の土層の注記については、『新版標準土色帳』（小山正忠・竹原秀雄　1993）に準拠し、基本層序及び検出遺構の土層観察表は、巻末に一括して示した。

4　挿図の縮尺は各図ごとに示し、各種遺構平面図の方位は磁北を示した。なお、写真図版の縮尺は統一を図っていない。

5　遺物番号は図版・写真で個体ごとに同一の番号を付し、文中では（　）内に示した。

6　出土遺物及び記録図面等並びに写真関係資料等は、青森市教育委員会浪岡教育事務所が保管している。

7　発掘調査の実施にあたっては、調査対象区周辺の地権者の方々をはじめ、多くの方々の協力をいただいた。また、報告書の作成にあたり、次の方々からのご教示・ご指導を賜わった。ここに深く感謝の意を表する次第である。（敬称略・順不同）

村越潔・関根達人

8　挿図で使用したスクリーントーンの表示は、次のとおりである。

凡　例

赤色顔料の付着		アスファルトの付着	
炭化物の付着		(石器の) 自然面	
黒色処理		平面・層序図内土器	
熱変箇所			

目　　次

序

例言・目次

第１章　調査に至る経緯 …… 1

第２章　調査経過（調査日誌より抜粋）…… 4

第３章　検出遺構 …… 9

第４章　出土遺物 …… 26

第５章　まとめ …… 35

第６章　吉内遺跡と周辺の遺跡 …… 37

第７章　県営本郷地区ふるさと農道緊急整備事業に係る緊急発掘調査報告
（中屋敷遺跡・吉内遺跡・篠原遺跡）の総括 …… 41

参考文献・引用文献…… 45

発掘調査抄録…… 45

写真図版…… 46

第１章　調査に至る経緯

平成 15 年度当初に、青森県中南地方農林水産事務所から旧浪岡町教育委員会に対し、旧浪岡町農政課を介して農道敷設計画箇所について発掘調査の対象となるか否かの問い合わせがあった。計画対象地が、吉内遺跡と篠原遺跡にまたがるため、平成 15 年 8 月 27 日に町農政課と事業主体である中南地方農林水産事務所とともに事業の検討に入った。この席で、15 年度内の予定では、補正予算の議決・執行が 9 月以降・10 月からの執行となるため、調査及び工事に充分な期間が取れないこと、また、10 月以降は遺跡周囲すべてのリンゴ園が農繁期に入るために、農道を封鎖しての調査は地域に多大な負担をかけることが予想されたため、平成 15 年度内は用地買収に留めることとなった。

吉内遺跡については、平成 16 年に調査を行ったが、篠原遺跡については用地買収及び調査時期等の関係から再度持ち越しとなり、平成 17 年度に調査することとなった。

以下、下記の「平成 17 年度篠原遺跡発掘調査要項」参照。

平成 17 年度篠原遺跡　発掘調査要項

青森市教育委員会浪岡教育事務所社会教育課

1. 調査の目的

平成 17 年度に施工される「県営本郷地区ふるさと農道緊急整備事業」に係り、周知の埋蔵文化財包蔵地について緊急に発掘調査を行い、文化財の記録保存を図ることを目的とする。

2. 調査経緯

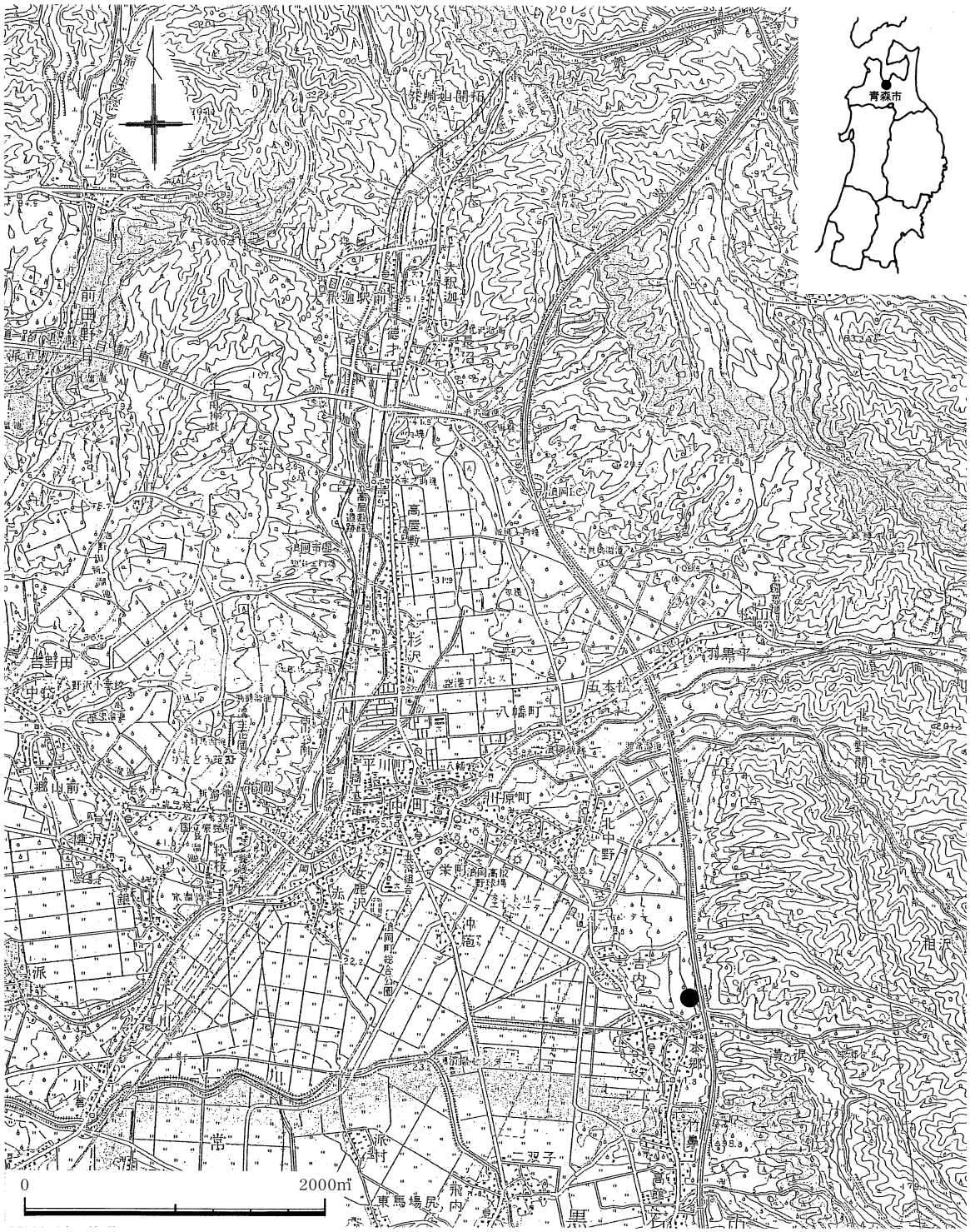
平成 15 年度当初に、旧浪岡町農政課から周知の埋蔵文化財包蔵地についての問い合わせを受けた。農道計画対象地が、吉内遺跡と篠原遺跡にまたがるため、平成 15 年 8 月 27 日に町農政課と事業主体である中南地方農林水産事務所とともに事業の検討に入る。平成 15 年度中の調査及び工事は、事業着手時期の関係で難しいことから、平成 16 年度は吉内遺跡について発掘調査を行い、篠原遺跡については、平成 17 年度に調査を行うこととした。

平成 17 年 4 月 1 日に浪岡町と青森市が市町村合併したことにより、調査主体が青森市教育委員会（浪岡教育事務所社会教育課）となり、工事発注元が中南地方農林水産事務所から東地方農林水産事務所に移管された。

3. 遺跡の概要について

篠原遺跡は本郷字田ノ沢、篠原に所在し、遺物包含地として登録されている。現状は一部道路も含むが大部分は農地である。弥生式土器破片数点、縄文後期土器破片若干、石皿、石鏃、石匙、砥石が表採されるなど、縄文時代後期・弥生時代後期の遺跡として知られ、『浪岡町文化財紀要Ⅱ』・『同Ⅳ』内の遺跡パトロール事業報告においても、遺物の表採が報告されている。

調査は「篠原遺跡」を南北に縦断する農道予定地を対象とし、延長 200m、対象幅 4m で、計 600 ㎡に及ぶ範囲である。



篠原遺跡位置図

平成 15 年 9 月 20 日、22 日に行われた地耐力試験の際の現地立会いからは、黒色土層が 40 cmから 120 cmと場所により厚さが異なるが、平均して 60 cmほど地山層上に残るものであることから、概ね遺構の保存状態は良好と考えられた。

篠原遺跡に隣接した東側は、昭和 53 年度に東北縦貫自動車道建設に伴う発掘調査が行われている。東

側隣接地には、縄文時代から古代にかけての遺構・遺物を検出した「松元遺跡」「杉ノ沢遺跡」があり、北側には、古代から中世の遺跡と考えられる「桃里遺跡」、北西には中世城館と考えられている「北畠館遺跡」、西側斜面低位には平成 14 年度農道整備に係る発掘調査により縄文時代後期から晩期の良好な資料を得た中屋敷遺跡がある。

また、篠原遺跡北側に隣接する吉内遺跡は、昭和 42 年 8 月に遺跡登録され、古代の遺物である土師器・須恵器片や鉄滓が表採されている。平成 8 年刊行の『浪岡町史研究年報Ⅰ』「浪岡町遺跡分布調査概報（成田誠治）」の中でも、当該遺跡出土の古代の土師器が報告されている。平成 16 年度に実施した調査（「吉内遺跡発掘調査報告書」『浪岡町文化財紀要Ⅴ』）では、古代を中心とする集落遺跡が確認され、丘陵上に古代の遺跡が広がることが確認された。

4. 調査地及び所有者

調査地は、その大部分が農道の拡幅であり、現在利用されている農道及び沿道の果樹園地がその対象となる。平成 16 年度内に買収が終了したため、調査時には公有地（県有地）となっている。調査対象地域は第 1 図参照。

調査地地番等　　青森市浪岡大字本郷字田ノ沢　地内

5. 調査面積（調査区位置は第 1 図参照）

篠原遺跡（しのはらいせき）　約 250 ㎡

6. 調査期間等予定（期間中に所定の日数を行う）

準　備　作　業	平成 17 年 4 月上旬	から	平成 17 年 6 月上旬
調　査　作　業	平成 17 年 6 月 13 日	から	平成 17 年 8 月 10 日
整理・報告書作成作業	平成 17 年 8 月 11 日	から	平成 18 年 1 月 10 日

7. 調査体制（6 月 10 日現在）

篠原遺跡発掘調査員　弘前大学人文学部　藤沼　邦彦

青森市教育委員会浪岡教育事務所　社会教育課（文化チーム）

課　　長　　成田　豊昭

主　　幹　　木村　浩一（発掘調査担当）

主　　査　　船水　良誠

主　　事　　竹ヶ原亜希（発掘調査担当）

調査作業員　　秋元　正子・鎌田　直美・鎌田　百合子・工藤　仁美・工藤　美香・工藤　泰子・須藤　千代・武田　秀美・田村　広江・西村　和子・西村　みと子・対馬　英子・対馬　睦子・長谷川　輝子・藤本　範子

8. 調査方法

今回の調査対象地は農地（果樹園）と農道であるため、9 月以降の農繁期に極力影響を与えず、短期間で終了できるよう、年度の早い段階で調査を開始し、9 月中には発掘調査を終了することが必要となる。

このため、当初からの表土除去時に遺構等を確認し、必要な箇所の調査を行い、確認した遺構を中心に記録保存を図る。また、遺構の広がりについてさらに検証し、遺構確認と遺物の検出に努める。

1）測量（実測）は、遣り方と平板測量を併用する。

2）遺構略称は、従来までの調査と整合性を持たせるため、原則として独立行政法人奈良文化財研究所方式をとる。　　例　掘建柱建物跡・SB、溝跡・SD

3）遺物略称は、従来までの調査と整合性を持たせるため、浪岡地区での発掘調査方式をとる。

例　土器・P、石製品・S、鉄製品・F

遺構については、時代・時期を問わず掘り下げを行う。遺構については、平板実測及び写真撮影等を行い記録の保存に努める。遺物については、可能な限りすべて取り上げるものとする。

調査区については、10m グリッドを基本とし、補助杭として 5m 間隔でグリッドピンを設定した。

基準となる杭（0 設定杭）は、道路工事用の測量杭とし、任意方向で（№.0 ＋ 7.53 西側幅杭から No.3 西側幅杭を見通した軸を基準として）設定した。この軸を J 軸とし、南北軸を算用数字（南へ昇順）、東西軸をアルファベット（東へ昇順）として設定した。

標高については、調査区北側にあった工事標高（BM6：53.780m）を用いた。

9. 調査報告書の作成

調査結果については、「篠原遺跡発掘調査報告書－県営本郷地区ふるさと農道緊急整備事業に係る緊急発掘調査報告－」として刊行し、成果を公表する。

第２章　調査経過（調査日誌より抜粋）

4 月 13 日（水）東地方農林水産事務所と打ち合わせ。昨年度からの計画に変更がないこと等を確認。

5 月 13 日（金）篠原現地踏査。南端の墓地北側から主に遺物が表採できる。東事務所からの発掘通知を収受。進達する。

6 月 10 日（金）東地方農林水産事務所と委託契約締結。

6 月 13 日（月）現場開始。資材搬入し、F 区の表土除去。一部撹乱が激しく、随所に伐根の痕跡が見られる。北側は古代、南側は縄文時代の遺物が検出される。縄文時代の遺物は中～晩期、古代と多様。

6 月 14 日（火）表土除去。K-19 区にて溝跡検出（→SD-01）。中央部では縄文時代後期前葉の遺物が多く検出される。工事標高（BM6：53.78m）を利用し、BM を移設する。BM1（57.96m）、BM2（55.06m）。グリッドを任意方向で設置する。

6 月 15 日（水）K-21 区にて、穿孔のある石製玉を検出。最北側部の遺構確認図作成。確認状況写真撮影。

6 月 20 日（月）SX-01･02 掘り下げ。遺物検出状況写真撮影。K-20 区にて方形のプランを検出。古代の SI か？

SX-03とし写真撮影及び確認状況を平面実測。西側壁沿いにトレンチを入れる。K-24区は黒色の覆土が厚く堆積する状況が見られる。

6月21日（火）SX-01・02完掘。K-19区完掘平面図・西壁層序図作成。レベリング。SX-03西側に南東－北西溝１条を検出。SD-01と命名し確認図作成。掘り下げる。SX-05に東西ベルトを設定し、掘り下げ。10㎝ほどで底面を検出。

6月29日（水）K-19区北側に排土移動。SD-01完掘。SX-04東西層序図実測及び写真撮影、完掘。SX-05南側を掘り下げ、完掘平面図及びレベリング終了。K-21区遺構確認平面図実測。SMP（土器埋設遺構）-02・SX-06半截。K-22・23区移植へらにて掘り下げ。一部で地山土が黒色土と逆転して堆積する箇所があり、農作業による痕跡と思われる。K-24区黒色土直下で硬くしまった土の範囲を確認。

6月30日（木）SD-01は一気に埋め戻した様相。K-20区北側表土除去及び掘り下げ。SD-01とSX-03の南側延長を確認し、SX-03とSX-05は同一遺構であると確認できた（SD-01がSX-03より新）。SMP-01・03掘り下げ。SMP-02からは倒立した台付鉢他、数個体の土器を検出。K-22・23区は上部を削平されている。K-24区掘り下げ。石鏃・剥片・チップが多い。

7月7日（木）SD-01完掘。SD-01は東側に一段緩やかな段が見られ、造り替えの可能性を考慮。SX-03写真撮影・完掘平面図作成。SX-05西側に方形？のプランを検出。柱痕跡を思わせる堆積状況が見られる。SMP-01～03半截終了。K-21～24区は果樹改植に伴う抜痕の影響が見られ、遺物が散布的に検出される。

7月8日（金）調査区写真撮影。SX-06、SMP-01～03、SMPと重複するSX-09～11の土層注記。

7月12日（火）SMP-01・SX-09完掘。SMP-01の東に重複してSMP-04を確認。SMP-04が新。SMP-02掘り下げる。SMP-03・SX-11、SX-12、SX-13半截。SX-06完掘。

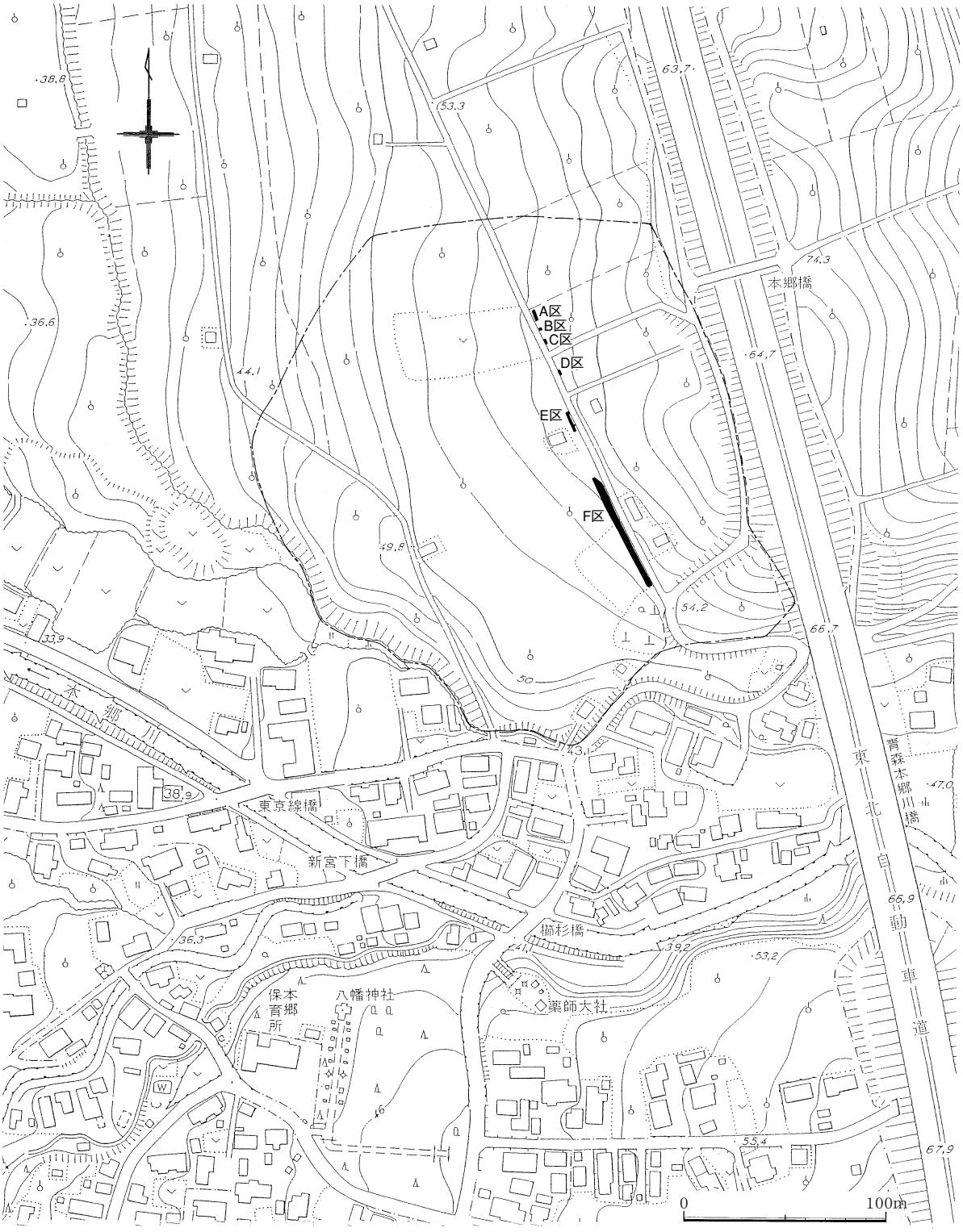
7月13日（水）K-23・24区掘り下げ。24ライン付近で急激に地山が落ち込む。覆土から剥片・石鏃が多く出土する。K-21・22区にて遺構確認。SMP-04・SX-14・15命名。SMP-04確認面、K-21～23区の遺物取り上げ。SMP-02・03、SX-10～12完掘。SMP-03から土偶の一部を検出。SX-08にベルトを設定、掘り下げ。

7月14日（木）SX-08を継続して掘り下げ。SMP-03・SX-11完掘。完掘平面図実測。SX-15掘り下げ継続。埋土より近世～縄文時代までの遺物が検出される。SMP-05半截。SX-14十字にベルトを取り掘り下げる。

7月15日（金）K-23・24区遺物取上げ。SX-15出土遺物を一括取り上げ。SX-03南北ベルト層序図実測・土層注記。SX-03・SD-01レベリング。SMP-04層序図実測・土層注記。SD-01とSX-08はSX-08が新しい。

7月19日（火）K-23・24区掘り下げ。北東から南西に走る溝など、重複する遺構を確認。調査区東西壁にて溝を掘り下げる。SX-14を掘り下げ。北東側が炭化物が多く、円形のプランとなる。Pit-01・02半截。SX-15は2基の土坑が重複することを確認し、新しい南側をSX-15a、北側をSX-15bとする。SX-16を掘り下げ。遺物を散布的に検出する。K-21区の撹乱精査。SD-02、SX-15a・SX-15b・SX-16、Pit-01・Pit-02確認平面図を作成。

7月20日（水）K-24区掘り下げ、層の堆積状況を確認する。Pit-03検出し半截。Pit-01～03、SMP-05、SX-08、SX-15a・SX-15b、K-19・22区調査区ベルトの層序図作成。遣り方実測用に杭を設置。北側調査区にて杭打ち。SMP-04土器検出状況を遣り方にて実測。K-22区、SX-16掘り下げ。北西側から砂層が検出される。K-23区西側は撹乱を受けている印象。SX-15b底面から須恵器甕胴部片を検出。敷き詰めた可能性を考慮。



第１図　篠原遺跡調査区位置図

7月21日（木）昨日実測した層序図について、土層注記実施。SX-17・18層序実測。土層注記。K-22区調査区ベルト層序図作成。層注記。SX-16掘り下げ。

7月25日（月）北側調査区（E区）表土除去。水道管埋設等により撹乱を受け、遺構は殆ど確認できない。SX-03ベルト除去。SX-22を設定、掘り下げ。SX-15・16遺物取り上げ。K-23・24区（SD-03・04、SX-19）確認平面図作成。遺物取り上げ。SD-04他半截。SX-14土層実測・注記。

7月26日（火）篠原遺跡発掘調査員、弘前大学藤沼教授指導来訪。遺跡・遺構・遺物についてご指導いただく。SX-08完掘。SX-16遺物取り上げ。砂？範囲実測及びレベリング。K-24区遺構掘り下げ。

7月29日（金）SMP-04平面図・層序図補正。SX-16遺物取上げ。近現代と思われる陶磁器検出。

8月1日（月）E区完掘。路線東側にて、調査区（A～C区）を設定し掘り下げ。GL-60㎝で地山面を検出したが、覆土はビニル・現代の鉄製品を含む黒色土となる。SMP-04土器取り上げ。平面図・層序図等補正・加筆。遺構掘削時の道具痕を検出。SX-22・23完掘。SX-16掘り下げ。現代の釘等を壁沿いに検出する。SX-14a・b確認及び遺物取上げ（南側のaが新）。Pit-01・02・SMP-05完掘。K-23区撹乱除去。

8月2日（火）A区を南側へ拡張。現代の土が厚く（GL-40㎝以上）堆積し、沢目でもあることからこれ以上の掘り下げは不要と判断（農道造成によって遺構面が破壊されないことから）し、堆積状況を確認するに留めた。A～C区層序写真。K-21区完掘。Pit-04完掘。SX-16ベルト除去。底面に梯子状の布掘り基礎痕跡を確認する。K-24区覆土掘り下げ。SMP-04の平面図を実測。層序図補正。

8月3日（水）D区掘り下げ。工事路盤の深さまで遺構面は確認されなかったことから、これ以上の掘り下げを中止。K-20・21区、完掘写真用精査。SX-16完掘。SX-14層序図作成、土層注記。

8月4日（木）A～E区を土のうにて埋め戻し、終了とする。K-21・22区完掘。SX-32は溝が円形に巡る構造か。円形周溝の可能性を考慮。遺物は須恵器・土師器が主体。SX-33からは土偶が出土。K-23区確認の遺構、K-23・24区を掘り下げ、遺物取り上げる。

8月5日（金）K-24区東西ベルト層序図作成。下層まで一旦削平された後に黒色の覆土が遺物を巻き込み、堆積する。K-24区覆土遺物取り上げ。SX-30層序図作成・写真・注記。Pit-05・SX-31土層注記。SMP-04レベリング。

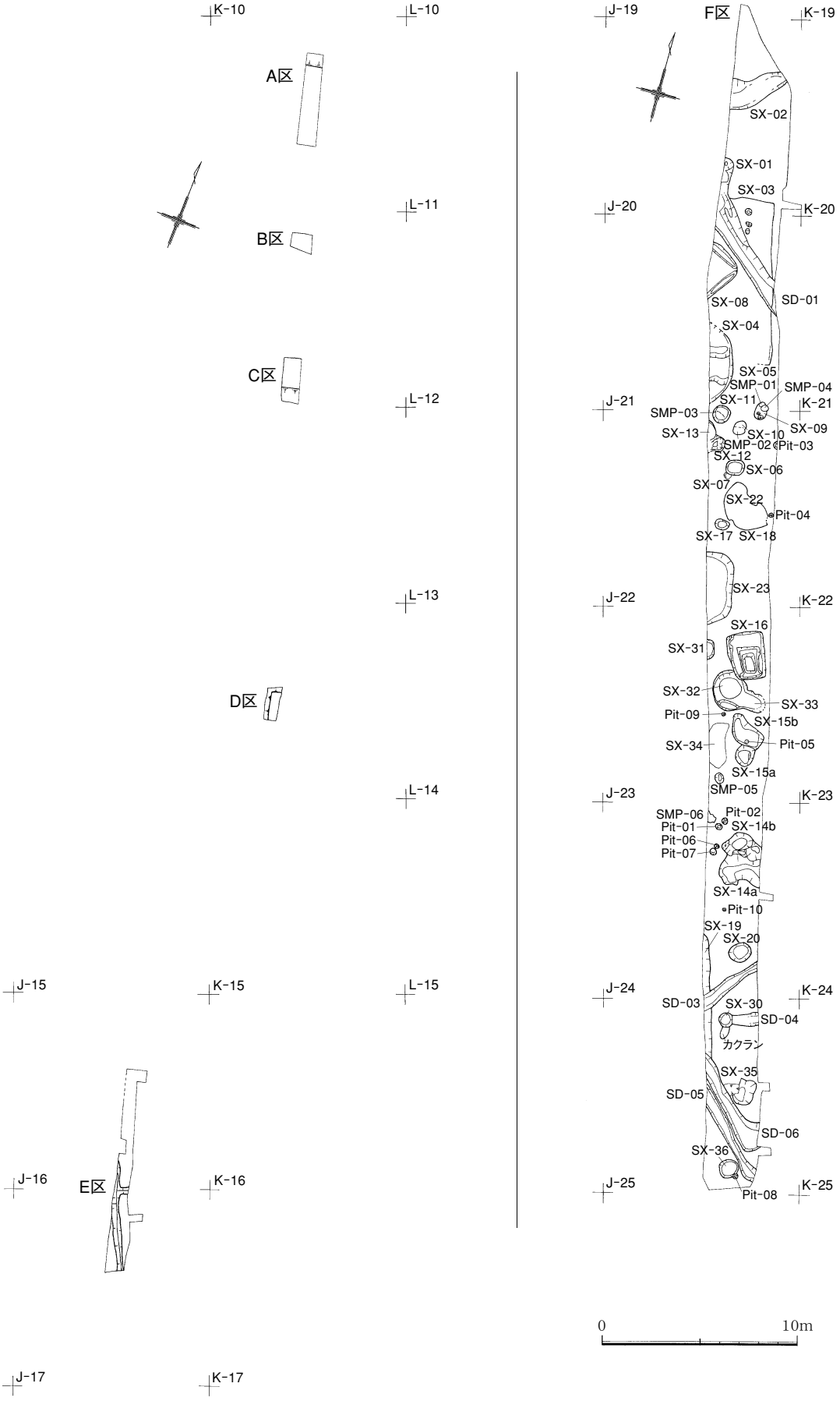
8月8日（月）K-24区東西ベルト除去。SX-30の遺物及びSX-14a出土の遺物取り上げ。SX-14完掘。K-24区覆土遺物取り上げ。SX-32・SD-03掘り下げ。

8月9日（火）K-22区全面精査。SX-32ベルト残して掘り下げ精査。SD-03壁面精査、SX-30精査。SX-35・36、SD-05・06設定。SD-06は東側で急角度に曲がる。周辺は重機他により大きく撹乱を受けており、時期・性格など不明な点が多い。SX-33層序図作成、掘り下げ。K-22・23区平面実測・レベリング一部残し終了。

8月10日（水）SX-32掘り下げ。K-23区にてSMP-06設定。深鉢倒立か。遣り方にて平面図、西壁にて層序図作成。上部は削平される。写真後、掘り下げ、完掘。K-21～23区精査。SX-35・SD-05・06完掘。

8月11日（木）SX-32・33完掘、レベリング。SMP-06注記。以上、篠原遺跡調査にて遺構掘り下げは終了。

8月16日（火）撤収及び引越し。発掘調査終了。


K-10
L-10
A区
B区
L-11
C区
L-12
L-13
D区
L-14
J-15
K-15
L-15
J-16
E区
K-16
J-17
K-17
J-19
F区
K-19
SX-02
SX-01
SX-03
J-20
K-20
SX-08
SD-01
SX-04
SX-05
SMP-01
SMP-04
SX-11
J-21
K-21
SMP-03
SX-09
SX-13
SX-10
SMP-02
Pit-03
SX-12
SX-06
SX-07
SX-22
Pit-04
SX-17
SX-18
SX-23
J-22
K-22
SX-16
SX-31
SX-32
SX-33
Pit-09
SX-15b
SX-34
Pit-05
SX-15a
SMP-05
J-23
K-23
SMP-06
Pit-02
Pit-01
SX-14b
Pit-06
Pit-07
SX-14a
Pit-10
SX-19
SX-20
J-24
K-24
SD-03
SX-30
SD-04
カクラン
SX-35
SD-05
SD-06
SX-36
J-25
K-25
Pit-08
0
10m

第２図　検出遺構平面図

第３章　検出遺構

調査は、当初遺跡内の農道敷設対象地である 800 ㎡の範囲を想定したが、実際は農道拡幅工事であることや設計上の変更等のため、遺跡に影響を及ぼす範囲は少なくなり、拡幅対象地となる農地部分約 250 ㎡の範囲について発掘調査を実施し､残りについては工事時の立会いを行った。調査箇所及び調査区名称･位置については、平面図（第１図）参照。

北側調査区（第２・３図、写真１・2、表１～5）

調査対象区全体の概要を理解するために、現況道路（調査対象区）に沿ってテストピットを設定した。北側から順にＡ～Ｅ区と呼称し、遺構の確認及び遺物の検出を試みた。結果、現地表面から工事により掘削される深さまでは、現代の耕作もしくは現農道を造成する際の工事に伴う土が厚く堆積する状況であり、遺構を確認することはできなかった。また、工事に先だち平成 15 年に行われた CBR 調査時に、黒色土層が厚く堆積することも確認されており、遺跡北側は旧地形で沢の可能性も考えられた。

遺物は、Ａ・Ｂ区から出土したがいずれも（1、2、3、4）耕作土となる表層からの出土であり、確実に当該箇所周辺の遺物であるか否か、篠原遺跡に由来する遺物であるかの関係は考慮できない状態であった。

以上の結果から、調査を行った北側調査区付近まで遺跡が伸びていることが確認できなかったことと、今回の農道整備工事による遺跡への影響が考えられないことから、北側については全面的な発掘調査を行わず、工事に際しての立ち会いを行うことで十分であろうとの判断に至った。したがって、北側のＡ～Ｅ区については以下に調査規模をあげ、詳細報告は行わない。

Ａ区は東西 100 ㎝、南北 500 ㎝で面積５㎡。深さは 30 ㎝程度掘り下げた。Ｂ区は東西南北とも 100 ㎝で面積１㎡、深さ 35 ㎝程度掘り下げた。Ｃ区は東西 100 ㎝、南北 230 ㎝で面積 2.3 ㎡、深さ 26 ㎝、一部 45 ㎝程度掘り下げた。Ｄ区は東西 100 ㎝、南北 170 ㎝で面積 1.7 ㎡、深さ 30 ㎝程度掘り下げた。Ｅ区は東西 70 ～ 100 ㎝、南北 10.3m で面積８㎡ほど、深さは 20 ㎝程度掘り下げた。

南側調査区

南側調査区としたＦ区は、西側に道路を拡張する計画で、新たに盛土及び拡張部の基盤整備工事を行うことにより遺構に影響が出る可能性が高い東西約 3.8m、南北 61m についてグリッドを設定した。Ｆ区の調査面積は約 230 ㎡となる。既存の道路については、盛土してある上層を舗装しなおすものであるため工事時の確認に留めることとした。なお、今回の調査の結果、Ｆ区からのみ遺構を検出した。内訳は、土器埋設遺構（SMP）６基、溝跡（SD）５条、柱穴跡（Pit）10 基、性格不明遺構（SX）31 基である。

近現代の耕作により、表土とともに地山層も一部で削平された痕跡が見られることから、遺構の深さについては、調査時に確認できた（残存していた）数値を用いている。以下、Ｆ区における遺構、遺物について述べる。

土器埋設遺構

縄文時代の土器埋設遺構と想定される遺構を６基検出した。

SMP-01（第５・６図、写真３・５、表24） K-20区で検出した。SMP-04、SX-09と重複し、いずれよりも古い。平面は南北長軸33㎝、短軸20㎝の楕円形を呈し、深さ38㎝を測る。

上部が削平されているため、遺構の全容は不明である。埋土からは縄文時代の粗製深鉢片を検出したが、SMP-04出土深鉢と接合することから、同時期の廃絶が考えられる。または近現代の農耕による削平及び撹乱が著しいため、土器片が移動している可能性も否定できない。

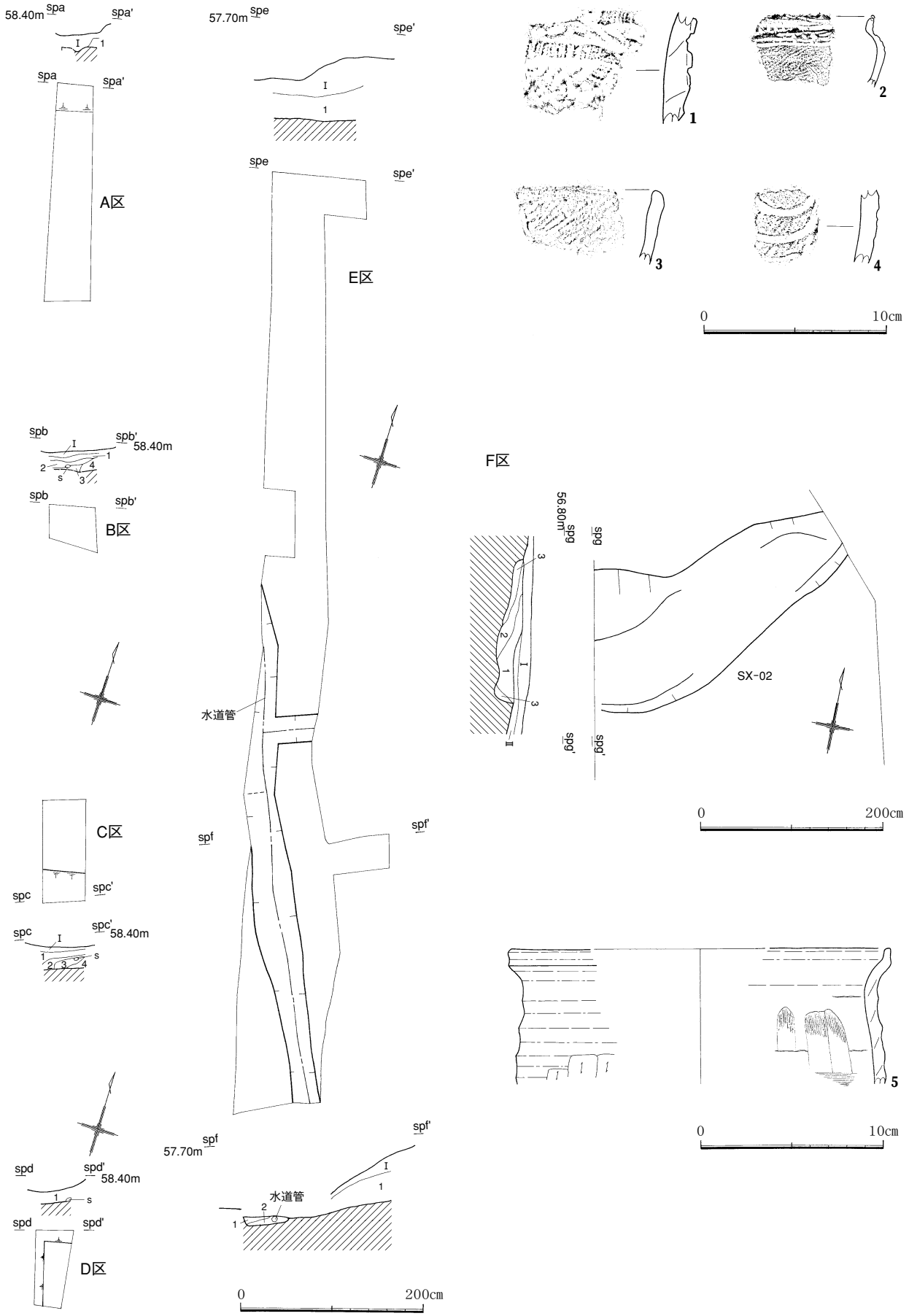
SMP-02（第５図、写真３、表14） K-21区で検出した。SX-10と重複し、SX-10より古い。縄文時代の台付鉢（21）が倒立して出土した他、縄文土器粗製深鉢胴部片（19、20）・剥片石器１点を検出した。平面は南北20㎝、東西40㎝の不整形を呈し、深さ15㎝から30㎝を測る。確認した平面形から遺構底部が南側に位置し、壁面が斜めとなる掘り方を呈している。骨片等は確認できなかった。

SMP-03（第５図、写真３、表15） K-21区で検出した。SX-11と重複し、SX-11より古い。平面は南北33㎝、東西70㎝の楕円形を呈し、深さ９㎝を測る。縄文時代の小型の深鉢片（22、25、26）、浅鉢片（24、27）や壷（23）が出土したほか、縄文時代晩期と思われる小型土偶（28）を検出した。当初胴部のみの確認であったため、掘り上げた埋土を持ち帰り精査したところ両脚部を検出した。しかし、頭部、両腕部は検出できなかった。骨片等は確認できない。

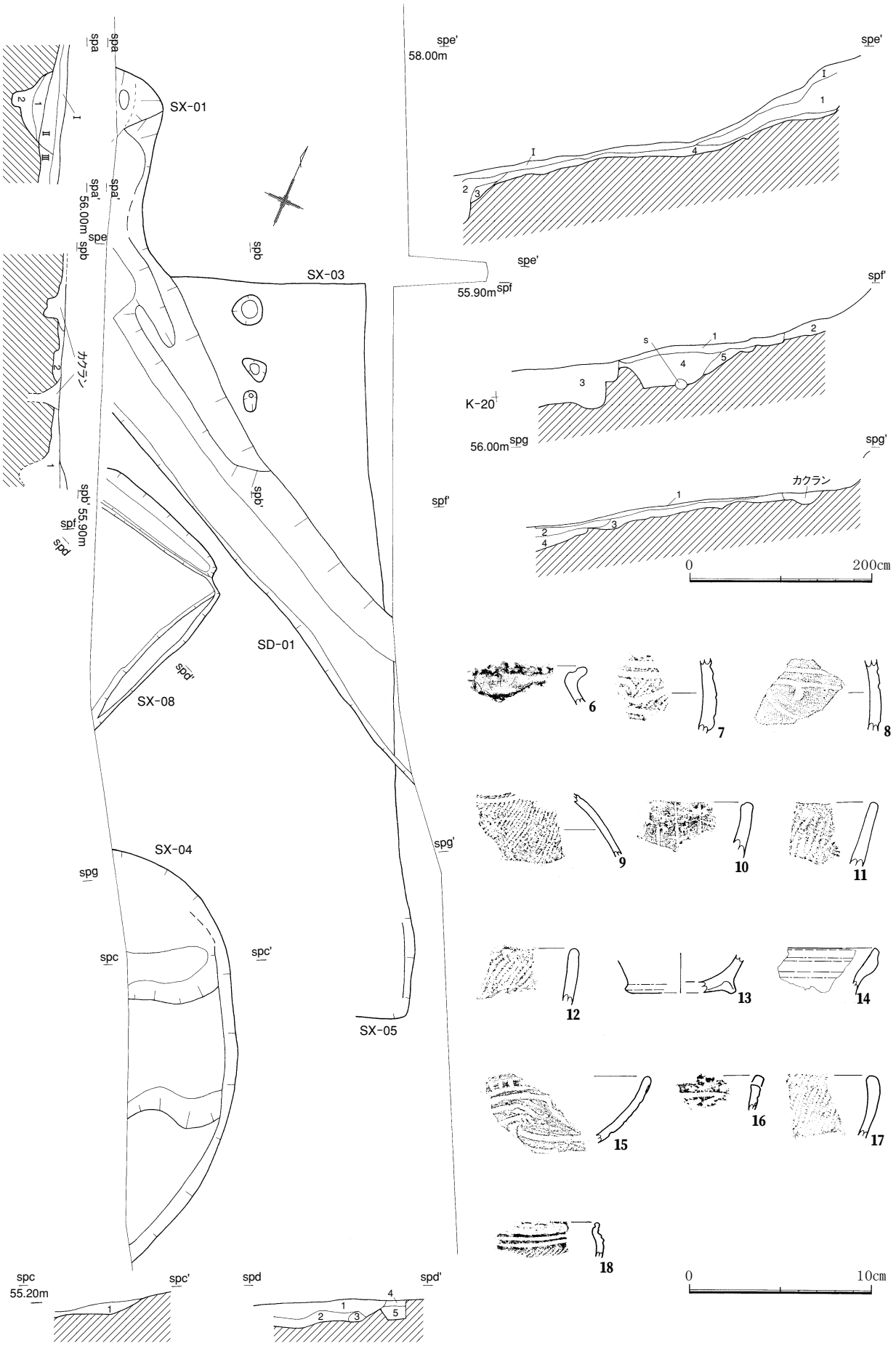
SMP-04（第５・６図、写真３・５、表23） K-20・21区で検出した。SMP-01、SX-09と重複し、SX-09よりも古く、SMP-01より新しい遺構。平面は直径35㎝の円形を呈し、深さ40㎝を測る。縄文時代の粗製深鉢２個体（33・34）を入れ子状に重ねた状態で検出した。内側深鉢（34）の埋土は黒色を呈し粘性が高い。内外深鉢の間の埋土は焼土が多く充填され、内側の深鉢は被熱による器面劣化が著しい。炉に据えられ使用されたことも想定されたが、内側の土器埋土中に炭化材がほとんど含まれないことから、炉として最終的な用途を終えたものではないと考えられる。また、掘り方には土坑を掘るために使われたと考えられる道具の痕跡が明瞭に観察される。埋土を取り上げ精査したが、骨片等は確認できなかった。

SMP-05（第８図、写真３、表28） K-23区で検出した。平面は南北50㎝、東西38㎝の楕円形を呈し、深さ13㎝を測る。上部が削平されているため口縁部を確認することはできなかったが、縄文時代の粗製深鉢１個体（70）が出土した。骨片等は確認できなかった。上層の覆土から（256）の赤色顔料付着石製品が出土したが、本遺構との関係は不明である。

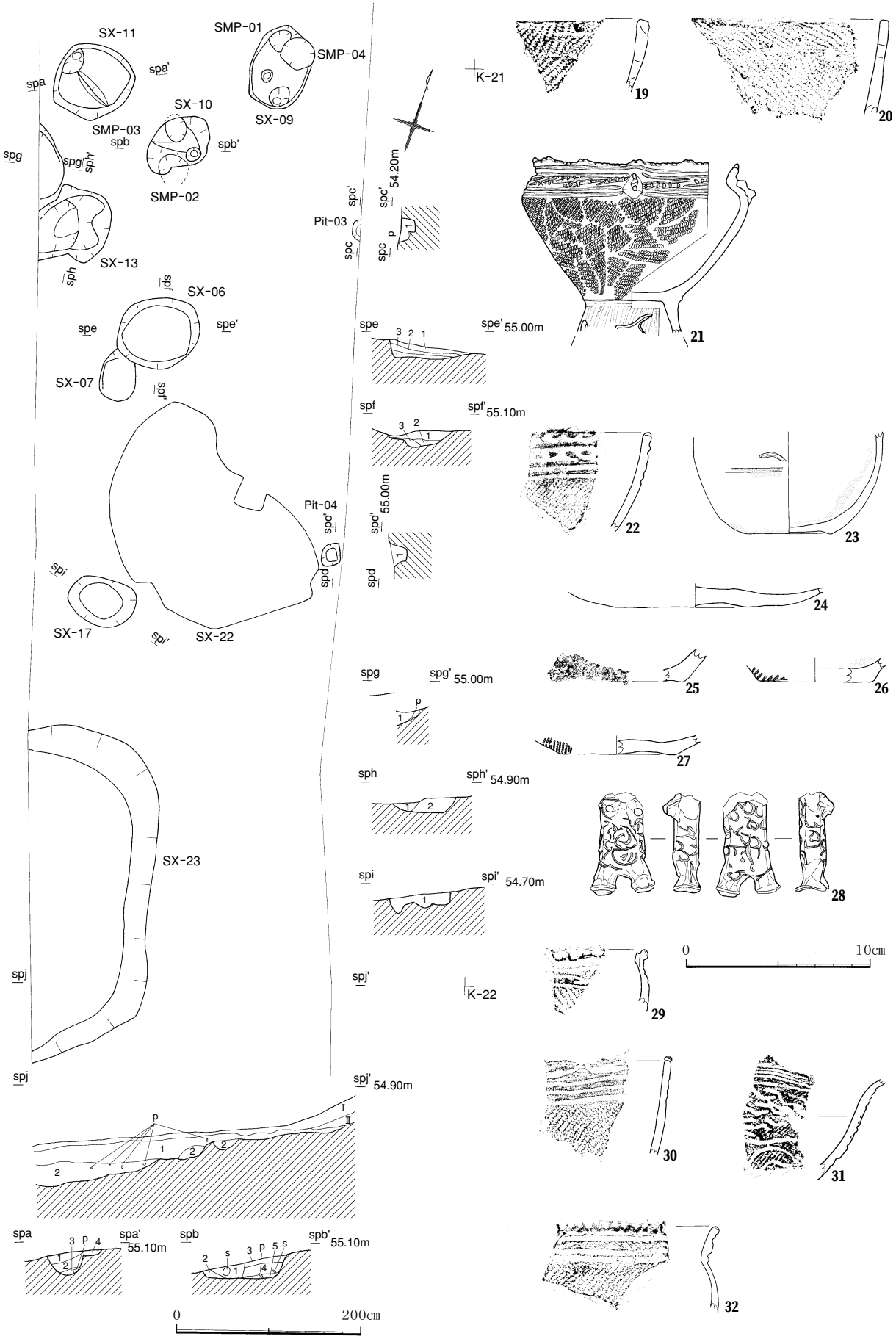
SMP-06（第10図、写真４、表32） K-23区で検出した。平面は南北40㎝、東西44㎝の楕円形を呈し、深さ31㎝を測る。西側は調査区外に延びる。上部が削平されているため口縁部を確認することはできなかったが、縄文時代粗製深鉢１個体（100）や台付き鉢の破片（101）が出土した。骨片等は確認できなかった。



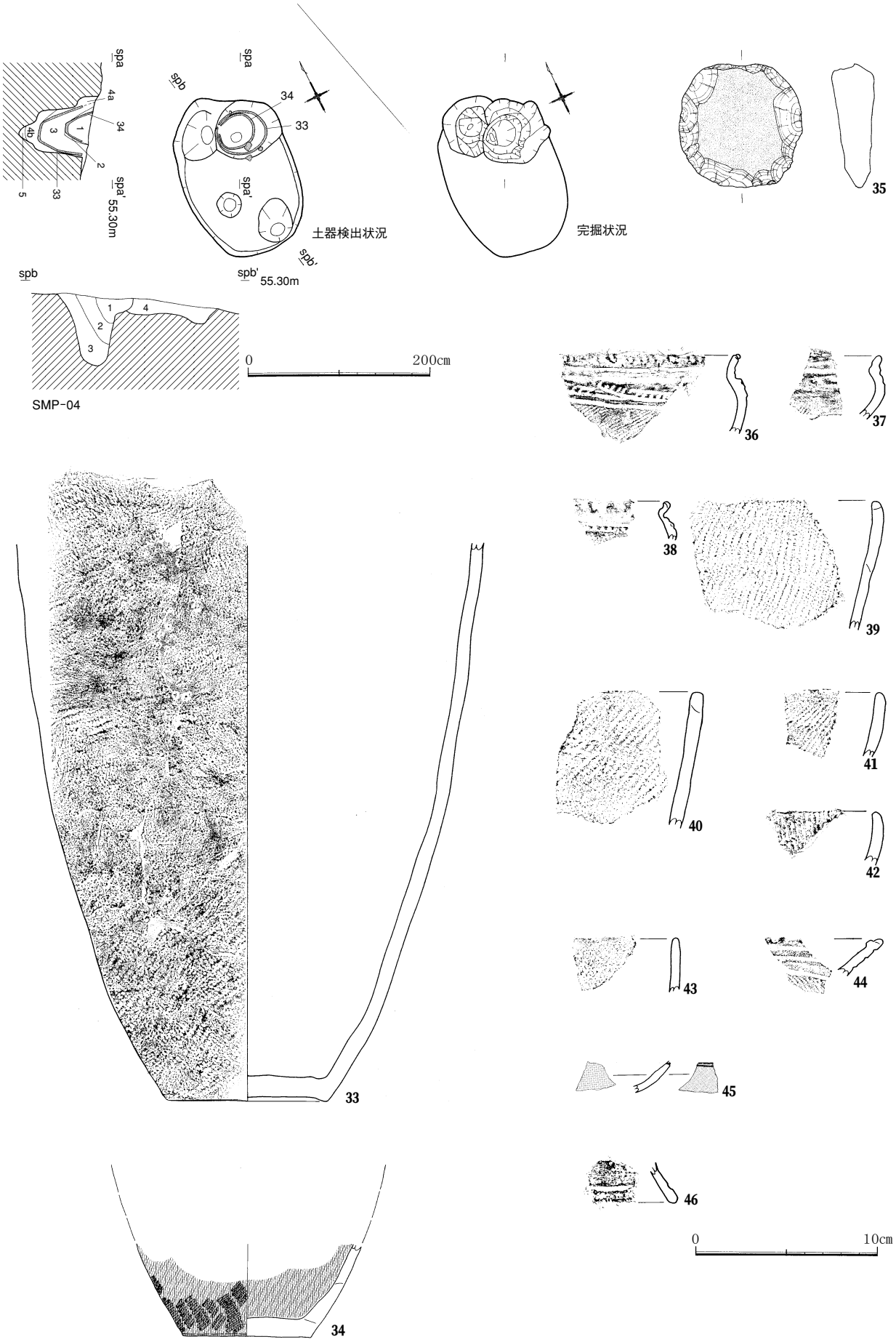
第３図　A～E区、SX-02及び出土遺物



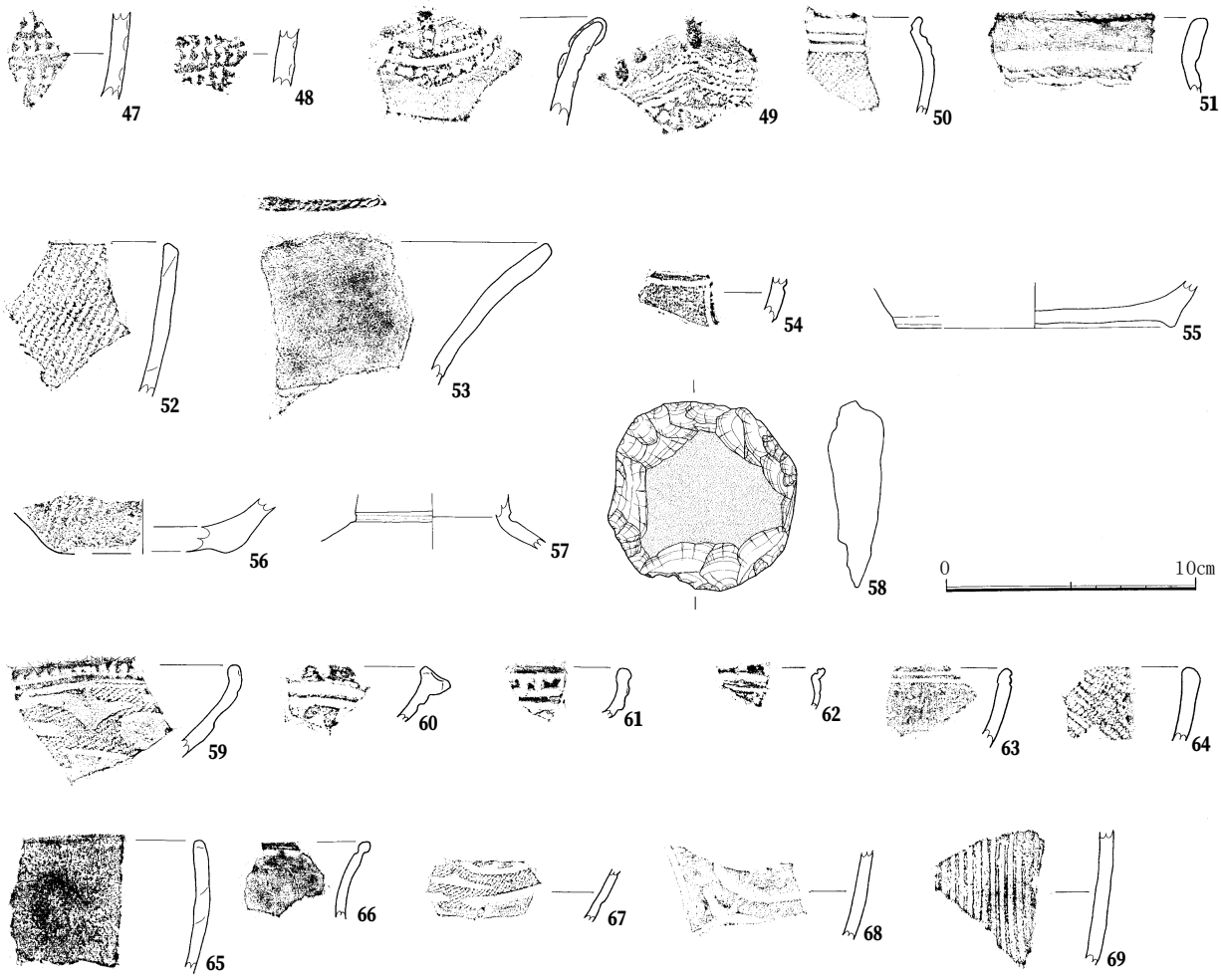
第４図　F区検出遺構及び出土遺物（1）



第５図　F区検出遺構及び出土遺物（2）



第６図　F区検出遺構及び出土遺物（3）



第７図　SX-22・23出土遺物

溝跡

溝跡と思われる遺構は６条検出した。その他、近代以降の農地改良や果樹の改植に際し、掘削・撹乱されたと思われる痕跡も多い。

SD-01（第４図、写真３、表７･８･11･12）　K-19･20 区で 5m ほどを検出した。両端は調査区外に延びる。検出南東から北西へ流れると考えられ、検出上面幅約 90 ～ 120 ㎝、底面幅 50 ㎝で断面は逆台形状を呈し、西側がより幅広となる。深さは概ね 35 ㎝となる。SX-08 より古いが、SX-03（05）より新しい。縄文晩期の土器片（6、7、8、9）や縄文土器の口縁部片（10、11、12）、底部片（13）、土師器の口縁部片（14）が出土した。

SD-02　K-22 区で東西溝として確認したが、精査の結果 SX-32・33 となり欠番とした。

SD-03（第 11 図、写真４、表 35）　K-23･24 区で検出した長さ 330 ㎝の東西溝。両端が調査区外へ延びる。西側で SX-19 と重複し、SX-19 より新しい。東側で検出上端幅 45 ㎝、底面幅 15 ㎝、西側では東側よりも規模が大きく、検出上端幅 80 ㎝、底面幅が 45 ㎝の断面台形状を呈する。深さは東側で 10 ㎝、

西側で 15 ㎝を測る。埋土から縄文土器深鉢口縁部等（110、111、112）と磨製石斧（113）が出土している。

SD-04（第 11 図、写真 4、表 36） K-24 区で検出した長さ 150 ㎝の東西溝。西側で SX-30 と重複し、東側は調査区外へ延びる。検出上端幅 62 ㎝、底面幅 30 ㎝で断面台形状を呈する。深さ 6 ㎝。

SD-05（第 11 図、写真 4･5･6、表 39） K-24･25 区で検出した、南東から北西へ走る溝。上端幅約 55 ㎝、底面幅 15 ～ 30 ㎝の断面台形状を呈し、深さ南東側で 7 ㎝、北西側で 20 ㎝。長さ 475 ㎝を測る。SD-06 の西側に併行する。上部を削平されているため、極めて残りが悪い。時期不明の縄文深鉢口縁部（114、115）と、壷形の肩部から頸部にかけての破片（116）がある。

SD-06（第 11 図、写真 4・5・6、表 39） K-24 区で検出した南東から北西へ延びる溝で、規模の大きい東側でほぼ直角に北東側へ折れる。両端が調査区外へ延びるが、長さ 5m、検出上端幅 55 ～ 145 ㎝、底面幅 45 ～ 100 ㎝を確認した。深さ南東側で 8 ～ 15 ㎝、北西側で 32 ㎝となり、SD-05 東側に併行する。上部を削平されているため、極めて残りが悪い。西側で SX-19 と重複し、SX-19 より新しい。縄文後期の深鉢口縁部片（118、119、120）や胴部片（117、121、122）晩期の台付き鉢片（123）、壷口縁部片（124）、土師器甕口縁部片（125）などが出土している。

柱穴跡

Pit-01（第 10 図、写真 4、表 30） K-23 区にて検出した。1 辺が 28 ㎝の隅丸方形を呈する。深さ 35 ㎝を測る。埋土より縄文後期の磨消し文が施文された破片（102）、晩期の壷形土器肩部片（103）が出土している。

Pit-02（第 10 図、写真 4、表 30） K-23 区にて検出した。東西 25 ㎝、南北 30 ㎝の楕円形を呈する。深さ 28 ㎝を測る。縄文後期の深鉢口縁部片（105、106）、晩期初頭の深鉢口縁部片（107）が出土している。

Pit-03（第 5 図、表 16） K-21 区にて検出した。東側の調査区縁辺で確認したが、規模は不明である。確認した深さは 17 ㎝を測る。Pit-04 と同様の埋土であることから、対応関係が想定できるが、他に関係する柱穴は確認されなかった。

Pit-04（第 5 図、表 17） K-21 区にて検出した。東西 22 ㎝、南北 26 ㎝の楕円形を呈する。上半は削平され、深さ 5 ㎝ほどを確認した。

Pit-05（第 8 図、表 27） K-22 区、SX-15b の底面にて検出した。直径 22 ㎝の隅丸方形を呈する。深さ 19 ㎝を測る。埋土より材状の炭化材が多く検出される。性格不明。

Pit-06（第 10 図、写真 4、表 33） K-23 区、SX-14b の北側にて検出した。東西 17 ㎝、南北 23 ㎝の楕円形を呈する。深さ 20 ㎝を測る。遺物なし。

Pit-07（第 10 図、表 31） K-23 区にて検出した。直径 25 ㎝の円形を呈し、深さ 28 ㎝を測る。縄文晩期の土器片（104）が出土している。

Pit-08（第 11 図） K-25 区にて検出した。東西 16 ㎝、南北 20 ㎝の楕円形を呈する。深さ 26 ㎝を測る。磨製石斧（126）が出土している。

Pit-09（第 8 図） K-22 区にて検出した。直径 21 ㎝の円形を呈する。深さ 12 ㎝を測る。縄文後期～晩期の口縁部片（127）が出土している。

Pit-10（第 10 図、写真 4、） K-23 区にて検出した。直径 18 ㎝の円形を呈する。深さ 20 ㎝を測る。

性格不明遺構

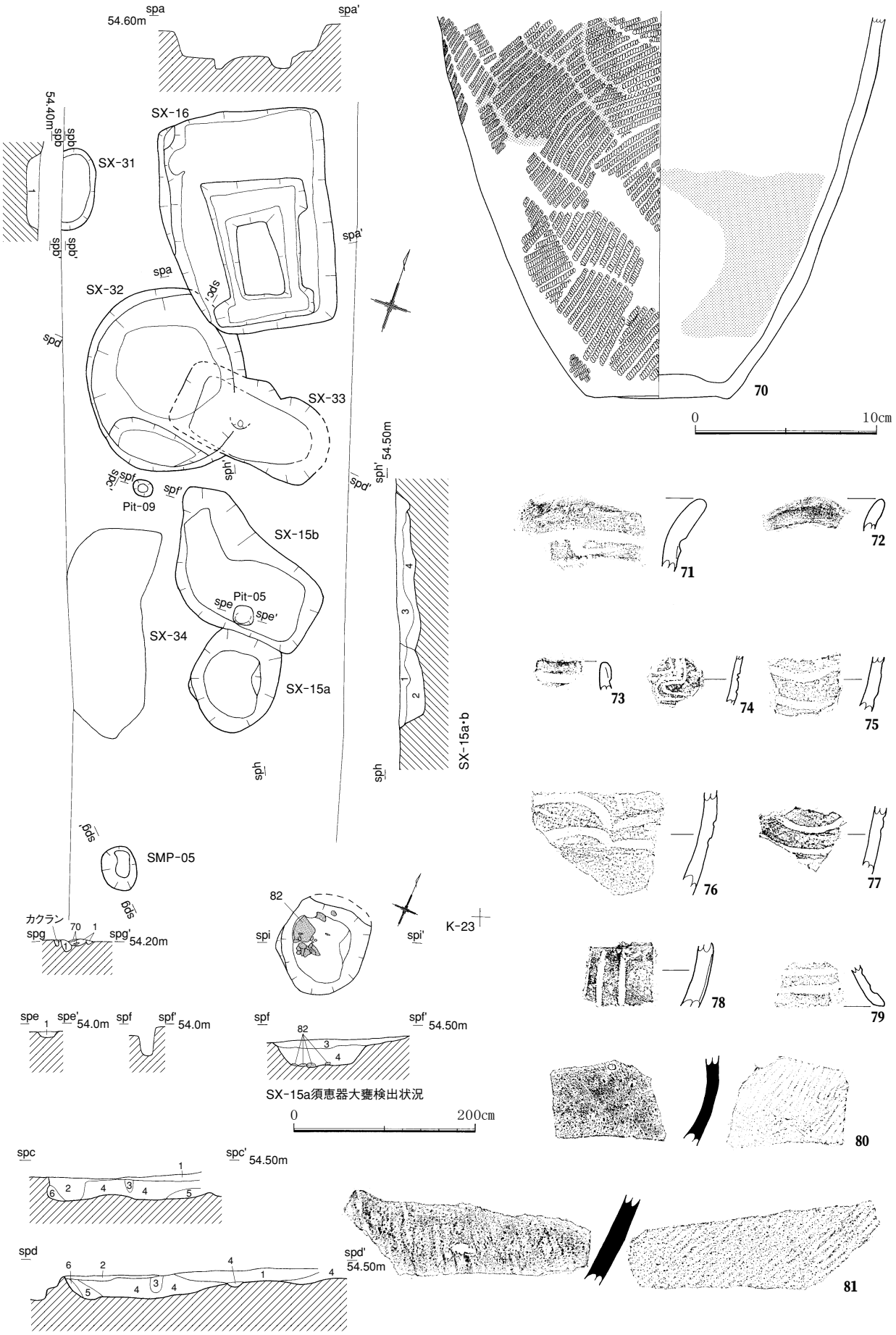
性格不明遺構は 31 基を確認した。耕作により上部を大きく削平されたりなどして実態が不明となった遺構や、極めて新しい近・現代の遺構、本来であれば SD（溝）、SK（土坑）、Pit（柱穴）として報告すべき遺構であるが、確認時に SX 番号を付され、その名称のまま、という遺構も含まれる。また、逆に当初 SI（竪穴建物跡）として命名したが、上層が削平されており埋土がほとんどなく、また柱穴やカマドも明確ではないため SX とした遺構もある。

遺構に伴うと考えられる出土遺物は多くないため、性格不明遺構としたものの中で時代を特定できた遺構はほとんどない。

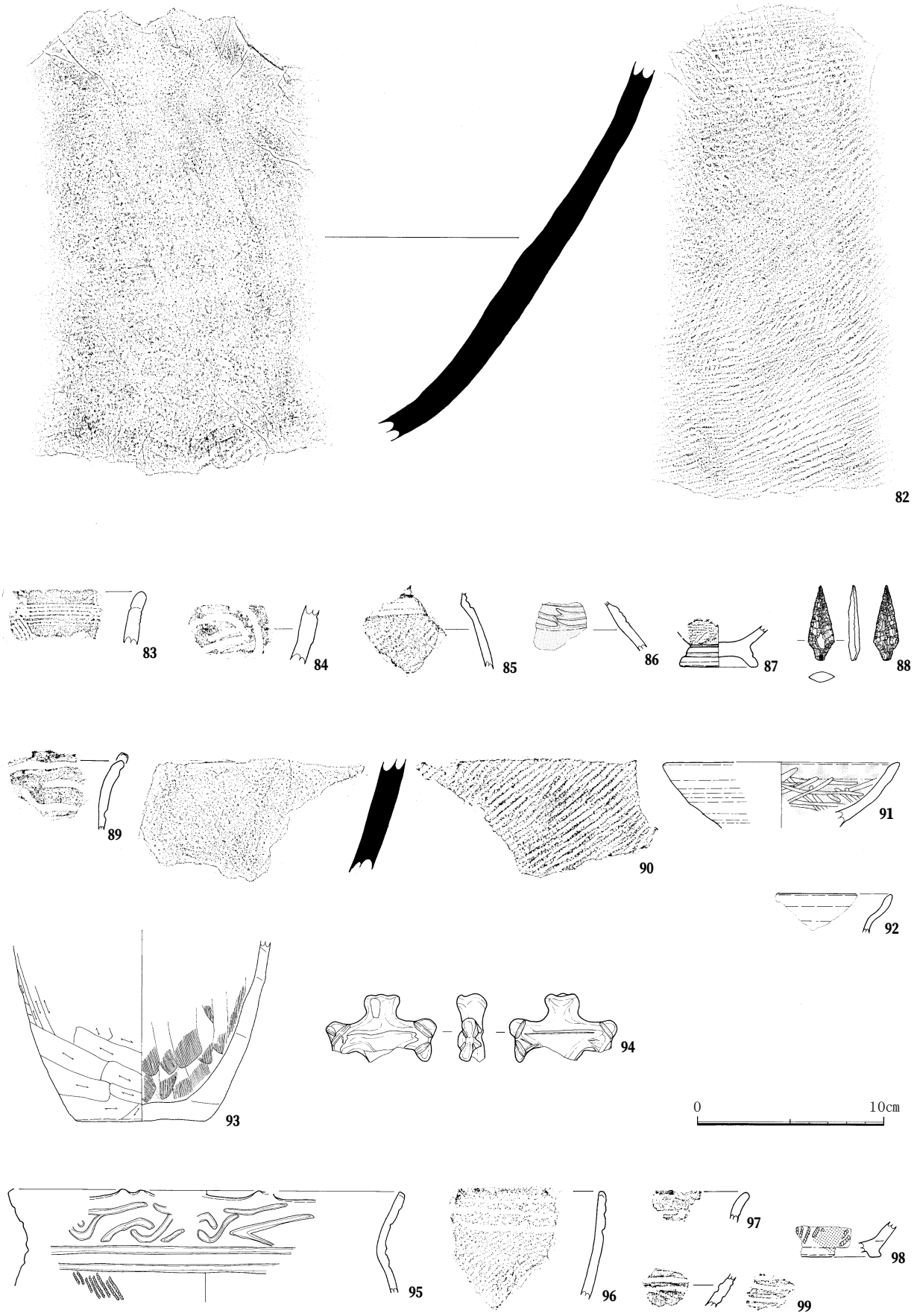
SX-01（第 4 図、表 7） K-19 区にて検出した。確認時は平面が南北 67 ㎝、東西 22 ㎝の不整形を呈し、西側は調査区外に、南側がベルト内へ延びると認識したが、ベルト除去後、SD-01 と同一遺構であることが判明した。深さは SX-01 部で深さ 53 ㎝を測った。

SX-02（第 3 図、写真 5、表 6） K-19 区にて検出した。検出上面幅 60 ～ 150 ㎝、長さ 300 ㎝となり、両端は調査区外へ延びる。底面幅は 30 ～ 70 ㎝で、深さ 15 ～ 20 ㎝の浅いＵ字形断面を呈する。SD（溝）の可能性が高いが、掘り方が一定せず、埋土も上下層を大きくかき混ぜられた状態であるため、撹乱の可能性もある。土師器甕口縁部片（5）が出土した。

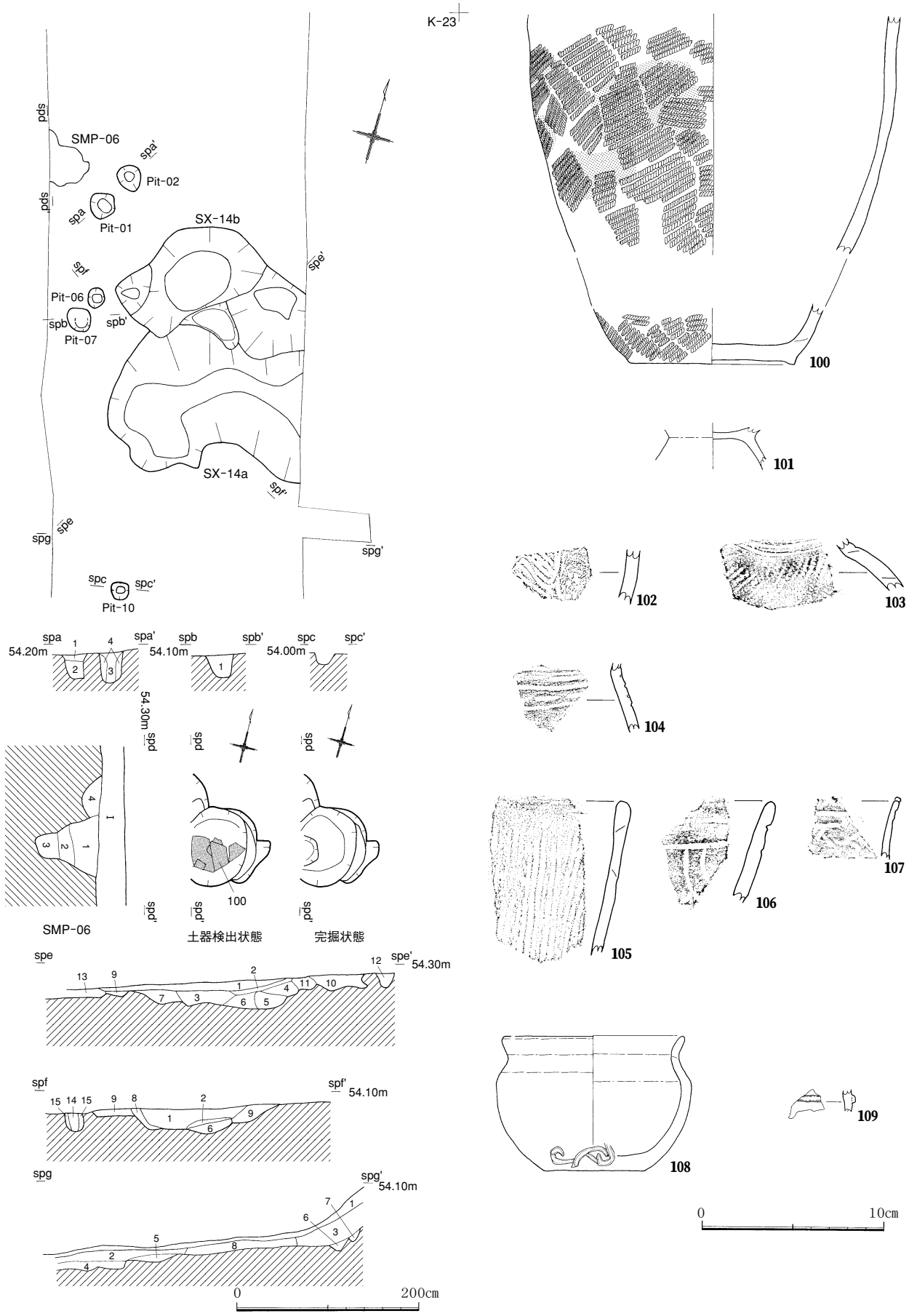
SX-03（第 4 図、写真 3、表 8・13） K-19・20 区にて検出し、SX-05 と同一の遺構と後に認識した。竪穴建物の可能性があるが、不明。南北 800 ㎝、東西 250 ㎝、深さ 3 ～ 10 ㎝を確認した。SD-01 と重複関係にあり、SD-01 より古い。西側は調査区外に延びる。上半部を大きく削平されているため、掘り方と床の一部が残存するのみである。遺物は埋土より石鏃などが検出されたが、遺構に伴なうも



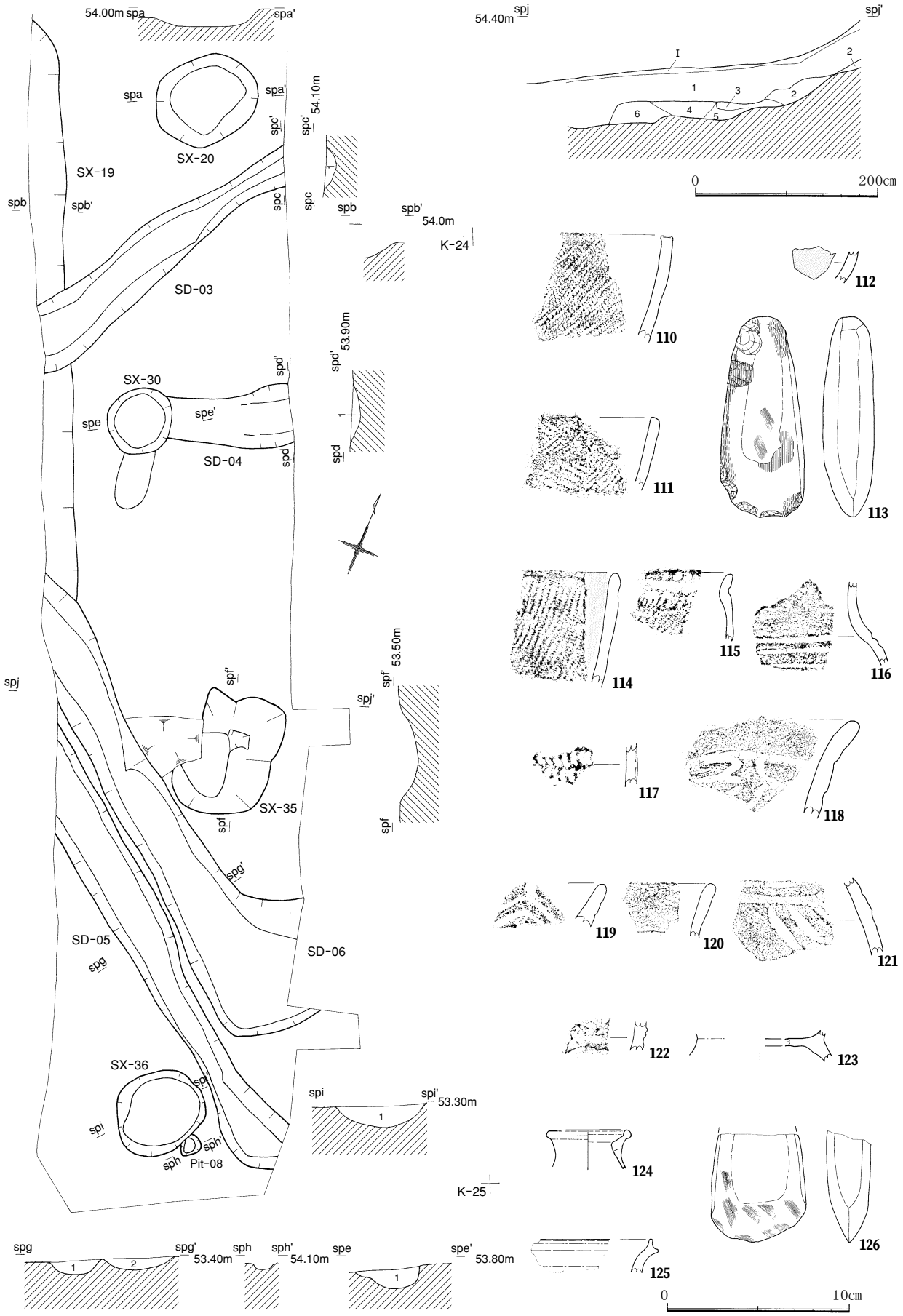
第８図　F区検出遺構及び出土遺物（4）



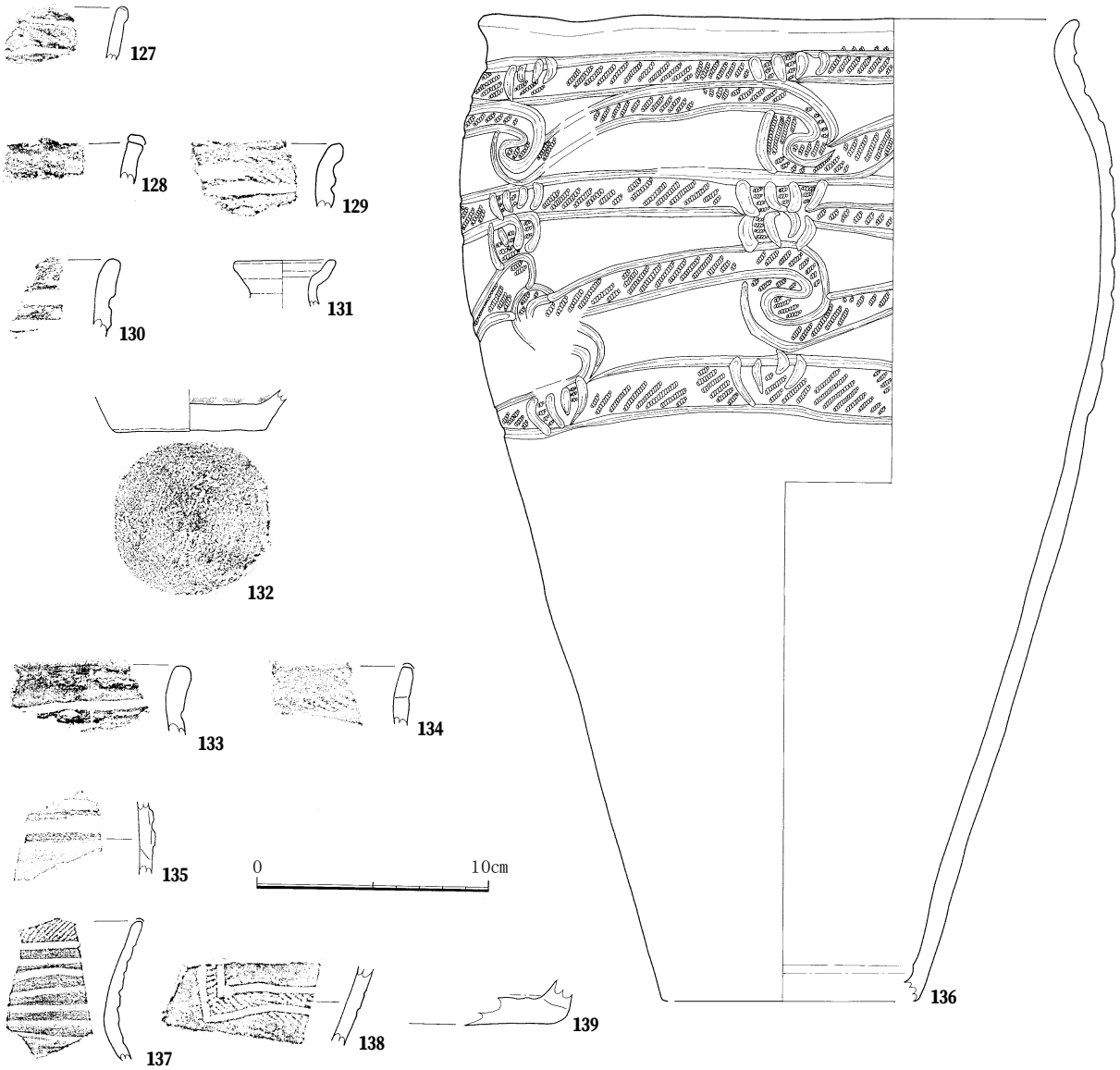
第９図　SX-15a・16・32・33出土遺物



第10図　F区検出遺構及び出土遺物（5）



第11図　F区検出遺構及び出土遺物（6）



第12図　SX-19・30・35・36出土遺物

のか否かは不明である。

SX-04（第４図、表９）　K-20 区にて検出した。南北 410 ㎝、東西 120 ㎝、深さ 14 ～ 25 ㎝を確認した。西側は調査区外に延びる。掘り方、特に床面が一定しない。大きく撹乱された場所、もしくは、遺構のような印象。遺物は縄文晩期土器片（15、16、17、18）が出土した。

SX-05（第４図、写真３、表 13）　K-19・20 区にて検出し、SX-03 と同一の遺構と後に認識した。竪穴建物の可能性があるが、性格･規模等不明である。深さはセクション面（確認面以下）で８㎝を測った。

SX-06（第５図、写真５、表 18）　K-21 区にて検出した。南北 78 ㎝、東西 90 ㎝の楕円形を呈する。深さは 15 ㎝を測る。SX-07 と重複関係にあり､SX-07 よりも新しい。縄文晩期の精製深鉢口縁部片（29）

が出土した。

SX-07（第５図、写真５）　K-21 区にて検出した。南北 60 ㎝、東西 37 ㎝の楕円形を呈する。深さ約 6 ㎝である。北側で SX-06 と重複し、SX-06 より古い。出土遺物には（30、31）がある。

SX-08（第４図、写真 3･5、表 10･12）　K-20 区にて検出した。一辺 200 ㎝、深さ 30 ㎝ほどを確認した。方形の建物の一部と思われ、西側は調査区外に延びる。確実に現代の建物と考えられる。出土遺物なし。

SX-09（第５･6 図、写真５、表 24）　K-21 区にて検出した。SMP-01･04 と重複し、いずれよりも新しい。南北 80 ㎝、東西 60 ㎝の楕円形を呈し、深さは 22 ㎝を測る。底面に 2 箇所ピット状に落ち込む箇所が見られる。

SX-10（第５図、写真３、表 14）　K-21 区にて検出した。東西 60 ㎝、南北 25 ㎝以上の楕円形を呈すると見られる。南側で SMP-02 と重複し、SMP-02 よりも古い。縄文晩期鉢形土器口縁部（32）が出土している。

SX-11（第５図、写真３、表 15）　K-21 区にて検出した。東西 86 ㎝、南北 50 ㎝以上の楕円形を呈すると見られる。深さ 20 ㎝を測る。南側で SMP-03 と重複し、SMP-03 よりも古い。西側でピット状に落ち込む箇所が見られる。縄文時代の円盤状石製品（35）が出土している。

SX-12（第５図、表 19）　撹乱であったため遺構の説明を行わない。

SX-13（第５図、表 20）　撹乱であったが、縄文時代晩期精製鉢の口縁片（36、37、38）、深鉢の口縁片（39、40、41、42、43）、浅鉢の口縁片（44、45）などの土器片が多数出土した。

SX-14a（第 10 図、写真４、表 33）　K-23 区にて検出した。新旧 2 基の土坑が重複する。東西 213 ㎝、南北 130 ㎝の不整形を呈する。深さ 25 ㎝。東側は調査区外に延びる。北側を SX-14b と重複し、SX-14b が新しい。遺構床面から須恵器大甕の胴部片を検出した。他に、条痕を縦位に施す深鉢口縁片（105）、縄文後期から晩期にかけてと思われる口縁部片（106、107）、頸部でやや窄まった鉢（108）などが出土している。

SX-14b（第 10 図、写真４、表 33）　K-23 区にて検出した。南北 90 ㎝、東西 150 ㎝の土坑と直径約 80 ㎝の不整形の土坑 2 基による。いずれも深さ 15 ㎝程度。南側で SX-14a と重複し、SX-14a が古い。撹乱の可能性も考慮される。時期不明で、隆帯を貼り付けた土器片（109）等も出土している。

SX-15a（第８図、写真５、表 29）　K-22 区にて検出した。新旧 2 基の土坑が重複する。南側の土坑を SX-15a、北側の土坑を SX-15b とする。SX-15a は長軸 105 ㎝、短軸 95 ㎝、深さ 27 ㎝の楕円形を

呈する。須恵器大甕胴部下半（82）を床面直上から検出した。周辺では竪穴建物跡は検出できないことから、大甕の設置土坑ではなく廃棄土坑の可能性がある。SX-15b との新旧関係は SX-15a が新しい。調査開始時には SX-15a、b を一つの遺構としてとらえていたため、埋土上層の遺物である縄文後期深鉢片（71、72、73、74、75、76、77）は一括して取り上げを行った。a、b に分離した後、a からは縄文後期の土器片（78）及び晩期の台付き鉢の台部（79）が出土しているが、須恵器大甕片の出土状態からは古代以降の土坑である。

SX-15b（第 8 図、写真 5、表 29） K-22 区にて検出した。長軸 210 ㎝、短軸 124 ㎝、深さ 22 ㎝の不整形を呈する。底面から Pit-05 を検出した。SX-15a と重複し、SX-15b が古い。埋土下層からは須恵器壺（80）、大甕胴部片（81）が出土した。

SX-16（第 8 図、写真 5） K-22 区にて検出した。埋土から砂質のタタキ状の破砕物や現代の釘が検出されたことから、現代の建物と認識した。東西 180 ㎝、南北 240 ㎝、深さ 45 ㎝を測る。埋め戻し時に時期不明の土器片（83）、縄文後期の土器片と思われるもの（84）、縄文晩期の土器片（85、86）、台付き鉢の台部（87）、石鏃（88）等が混入したものと思われる。

SX-17（第 5 図、写真 5、表 21）K-21 区にて検出した。長軸 80 ㎝、短軸 50 ㎝の楕円形を呈する。深さ 18 ㎝を測る。縄文晩期の台付き土器の台部片（46）が出土している。

SX-18　撹乱であったため遺構の説明を行わない。

SX-19（第 11 図、写真 5） K-23・24 区で検出した。調査区西壁に沿って長さ 640 ㎝、幅 35 ㎝に渡って広がり、西側へ落ち込む。西側は調査区外へ延びる。南側は SD-06 と重複し、SD-06 が新しい。15 ㎝まで掘り下げて終了した。全容は不明である。時期不明の土器片（127）が出土した。

SX-20（第 11 図、写真 4・6） K-23 区で検出した。平面は南北 95 ㎝、東西 110 ㎝の円形を呈し、深さ 10 ㎝を測る。断面は浅い皿型を呈する。遺構上層を耕作によって削平された可能性が高い。

SX-21　撹乱であったため遺構の説明を行わない。

SX-22（第 5 図、写真 6） K-21 区にて検出した。東西 210 ㎝、南北 245 ㎝、深さ 5 ～ 9 ㎝を確認したが、抜根に伴なう撹乱の可能性も考慮される。縄文中期の土器片（47、48、49）、晩期の土器片（50、51、52、53、54、55、56、57）、円盤状石製品（58）等が出土した。

SX-23（第 5 図、写真 6、表 22） K-21・22 区西側にて検出した。南北 370 ㎝、東西 130 ㎝、深さ 17 ㎝を確認した。西側は調査区外へ延びる。果樹の抜根に伴う撹乱と認識した。埋土上層から剥片が多く検出されたことから、当初は石器製作遺構の可能性を考えたが、調査を進めるに従い現代の撹乱で

あることが判明した。遺物は、縄文晩期の浅鉢口縁（59、60、61）をはじめ、同時期の土器片（62、63、64、65、66、67、68）が多数出土した。また、条痕を縦位に施す破片（69）等も検出している。

SX-24 ～ 29　撹乱であったため遺構の説明を行わない。

SX-30（第 11 図、写真 4、表 37）　K-24 区で検出した直径 73 ㎝の円形を呈する。深さ 17 ㎝。SD-04 と重複し、SD-04 よりも新しい。遺構南側に樹木の根による撹乱と思われる痕跡があるため、果樹植え替えに伴なう撹乱の可能性が考えられる。縄文晩期の土器片が出土した（128、129、130、131、132）。

SX-31（第 8 図、写真 6、表 25）　K-22 区にて検出した。南北 88 ㎝、東西 35 ㎝、深さ 16 ㎝を確認した。西側が調査区外に延びる。SX-30 と同様の様相を呈し、撹乱の可能性が高い。

SX-32（第 8 図、写真 6、表 26）　K-22 区にて検出した。東西 180 ㎝、南北 200 ㎝の円形状で深さ 30 ㎝を測る。SX-33 と重複し、SX-33 より古い。遺構確認時は円形の溝が巡る、いわゆる円形周溝の形状を呈していたが、掘り下げに伴ない完掘時には円形の土坑となった。しかし、確認時の形状からは使用時には円形周溝状の形態であった可能性は高いと思われる。埋土より鉄製品を含む須恵器（90）・土師器（91、92、93）・縄文土器（89）などが出土した。また、埋土の一部（南西側）から炭化材を多く検出したが、構造材という規模のものではない。

SX-33（第 8 図、写真 6、表 26）　K-22 区にて検出した。南北 90 ㎝、東西 180 ㎝の隅丸長方形状を呈し、深さ 20 ㎝を測る。SX-32 と重複し、SX-32 より新しい。埋土から土偶（94）が出土した。平面形状及び断面形、底部の形状から、現代の撹乱痕（果樹改植時の掘削痕）である可能性が高いと思われる。

SX-34（第 8 図）　K-22 区にて検出した。南北約 230 ㎝、東西約 80 ㎝の不整形を呈する。西側は調査区外に延びる。撹乱と判断し未掘で終了した。埋土からは縄文晩期の土器片（95、96、97、98、99）を検出した。

SX-35（第 11 図、写真 5・6、表 40）　K-24 区にて検出した。南北約 135 ㎝、東西約 100 ㎝、深さ 33 ㎝の不整形を呈するが、現代の農耕による撹乱で西側が重機により大きく掘削されている。縄文後期の深鉢 2 個体（136）が斜めに倒立した状況で検出されたが、撹乱が遺構上半部のほぼ全面に及んでいるため、当該深鉢が遺構に伴うものか否か、判断できなかった。出土遺物は、縄文後期から晩期にかけての土器片（133、134、135）が出土した。

SX-36（第 11 図、写真 4・6、表 38）　K-24 区にて検出した。直径約 100 ㎝の楕円形を呈する。深さ 15 ㎝。上層は削平されている可能性が高い。縄文後期から晩期の土器片（137、138、139）が出土しているが、遺構の性格等は不明である。

第４章　出土遺物

今回の調査では、縄文時代から古代、近世に至るまで幅広い時代の多様な遺物が出土した。遺物全体を見ると縄文時代後期から晩期の資料が主体的ではあるが、調査対象区全体にわたり遺構面上部が大きく撹乱され、遺構に伴うと想定される遺物が少ないことから、以下、時代ごとに資料を報告する。

1）縄文時代の資料

縄文土器

中期の土器

破片数及び個体数は少なく、ほとんどが小破片である。半截竹管による刺突が見られる破片（47、48、117）、口縁部に隆帯と縄文の押圧を用いた文様を施したもの（1、49、141、270）などが見られる。

後期の土器

後期の土器は概ね深鉢形が主となる。時期的には後期初頭のいわゆる十腰内Ⅰ式の範囲内の土器がほとんどである。底部が窄まった円筒形で、肩部で一度張った後一度窄まり、口縁部が外反するものである。施文は各種あり、口縁部から底部に向けて縦位に斜行気味の条痕を角度を変えて施すもの（10、244）、肩から胴部にかけて、沈線と磨消縄文により方形の区画文様を施したもの（138、153、156）や、沈線による入り組み文を施したもの（75、76、77、84、106、118、154、158、172、184、192、276、他）、沈線と磨消縄文により入り組み文を施したもの（7、136、155、176、213、275）、胴部に沈線による奔放な文様が描かれ、沈線間の一部に縄文を施すもの（149、180）などが見られる。

晩期の土器

精製深鉢（鉢）　精製の深鉢には、口縁部で一度内湾し、口唇部を強く外反させるものと、直行気味に外反しながら立ち上がるものがある。なお、ほとんどの個体が口唇に刻みを持ち、平縁になる破片は少ない。また、口縁部または胴部片が多く、台付き鉢になるか否かの判断がつかないものが多かった。口縁部が内湾するものは、羊歯状文を口縁部文様帯に施したもの（2、29、36、197、198）や、沈線のみを横位に施すもの（18、50、32、198、202、203、277）、口縁部直下から雲形文を施すもの（205）などが見られる。直行気味に立ち上がるものでは、羊歯状文を施したもの（22、191、193、199）、２～３条の沈線を口縁部に回したもの（63、96）数条の平行沈線を施すもの（137、186、187）、入り組み状の沈線文様が見られるもの（8、89、107、151、218）がある。入り組み状の文様が施されるものの中には、口縁部に１対の突起を４～６単位持ち、口縁部がくの字型に外反する鉢（95、148）がある。（148）は台付き鉢となるものと思われる。

浅鉢　口縁部が直行して立ち上がるものと、胴部から口縁部にかけて内湾するものがあり、直行するものはほとんどが口唇部に刻みを持ち、胴部外面に雲形の磨り消し文を持つ（44、60、196、200、201）。内湾するものは口唇部が平縁となり、胴部外面に雲形文を施すか、無文となる。直行する口

縁を持つものは、２条の沈線または２条の沈線間に刻みを持つもので、胴部は無文または磨り消し縄文が施される。胴部無文の個体を中心に内外面に赤色顔料による彩色が行われるもの（45、207、208、209、222）もみられる。また、皿状に浅く立ち上がりの低いもの（251、279）は、浅鉢に含めたが、破片が小さく全形が推定できない。グリッド覆土からの出土であり、遺構に伴なうものではないこともあり、時代も決定できない。

（251）は無文であるが、（279）は外面に縄文が施される。一部表面が剥離しているため、明確ではないが、磨消縄文が施されていた可能性がある。

台付き鉢　SMP-02 から倒立して出土したもの（21）が唯一遺構との対応関係の分かる遺物である。口縁部に羊歯状文を施し、口縁部文様帯の一箇所にいわゆる「B 突起」を貼り付けている。表面が良好に磨かれた台部には、円形と三叉文状の窓が交互に６箇所にあけられている。その他にも、台の下部に縄文を施した文様帯が施されるもの（146、246）や、無文または台下部に沈線が巡るもの（87、247、248）などがある。

壷（注口土器）　壷は無文の口縁部片が３点（124、131、144）出土している。胴部上半から頸部にかけての破片からは数種に分類できる。胴部以下に斜縄文を施し、頸部以上が無文と思われるもの（9 ？、85、103、145 ？、226）、胴部と頸部に沈線を施し、全体に縄文が認められないもの（57、280）、頸部と胴部の間に沈線よる文様帯や突起のつくもの（57、225）、胴部に縄文を施さず沈線で文様を描くもの（23）などである。注口土器の破片と考えられるもの（217、219、278）は、肩部の最も張った部分と考えられる。突起のつくものや沈線により三叉文状の文様が描かれている。赤色顔料が塗布されるものは、（23、86、223、225、280）が出土している。

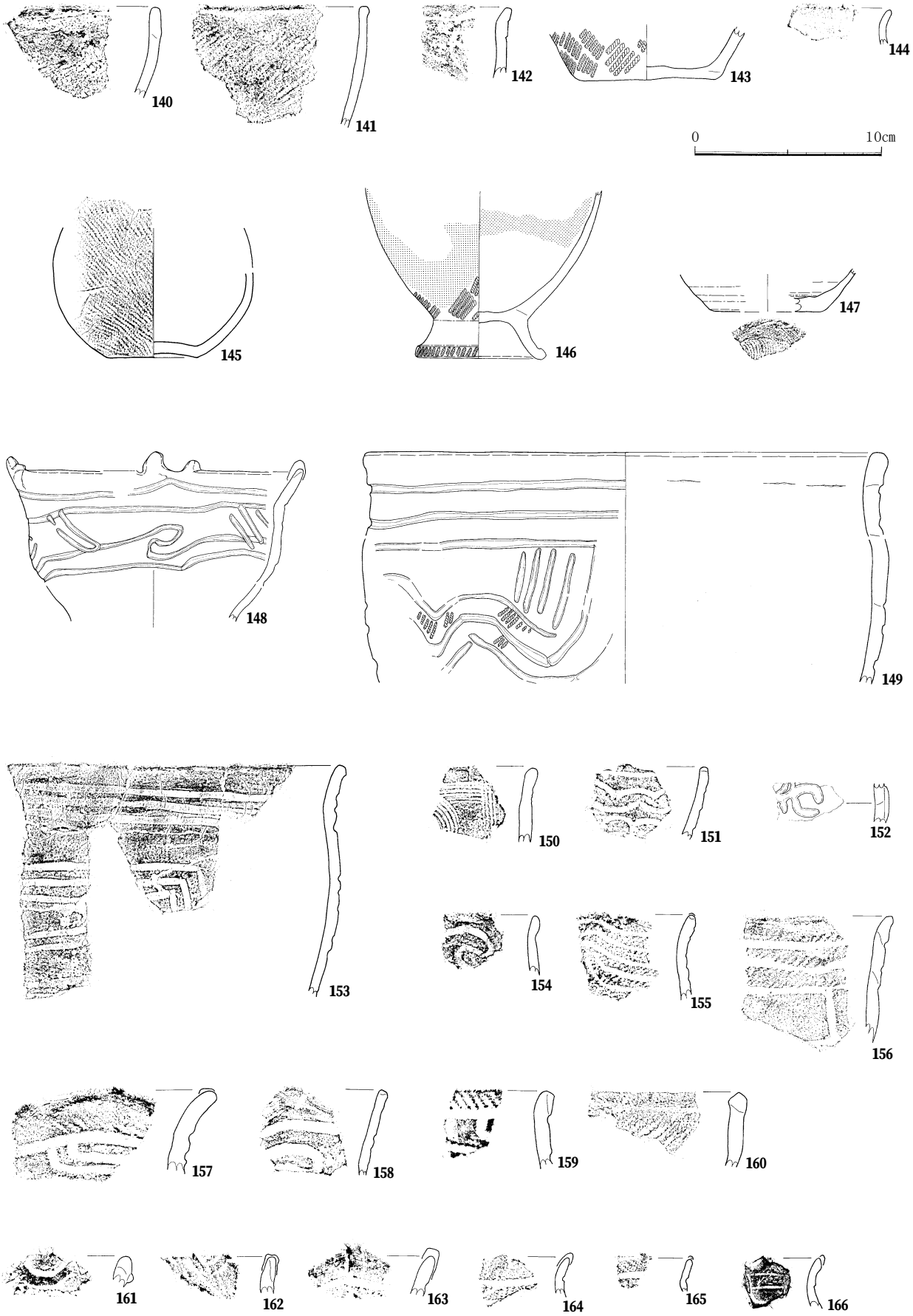
粗製深鉢　粗製深鉢は、埋設土器として用いられていたもの（19、20、33、34、70、100、111）については、単節の斜縄文が器面外面全体に粗く施されている。（33、34、70、100）は胴部下半から底部にかけてのもので、口縁部は農耕による撹乱時に削られていると思われる。（20）は口縁部に焼成前穿孔が認められる個体である。焼成前穿孔は（240）の破片でも認められた。（114）は内外面に赤色に彩色している。粗製の深鉢については、ほとんどが平縁の単節斜縄文を外面全面に施したものであるが、（238、239）は口縁部に１対の突起が認められるものである。

蓋　蓋と思われるもの（252）はグリッド覆土からの出土であり、遺構には伴なわない。

その他　（108）の土器は、胎土・調整が良好で出土時は土師器と分類していた。しかし、外面の底部近くに、沈線による入り組み状の文様が施されており、その器形と合わせて縄文晩期の広口壷（または鉢といったほうが良いのかもしれない）であろうと判断した。

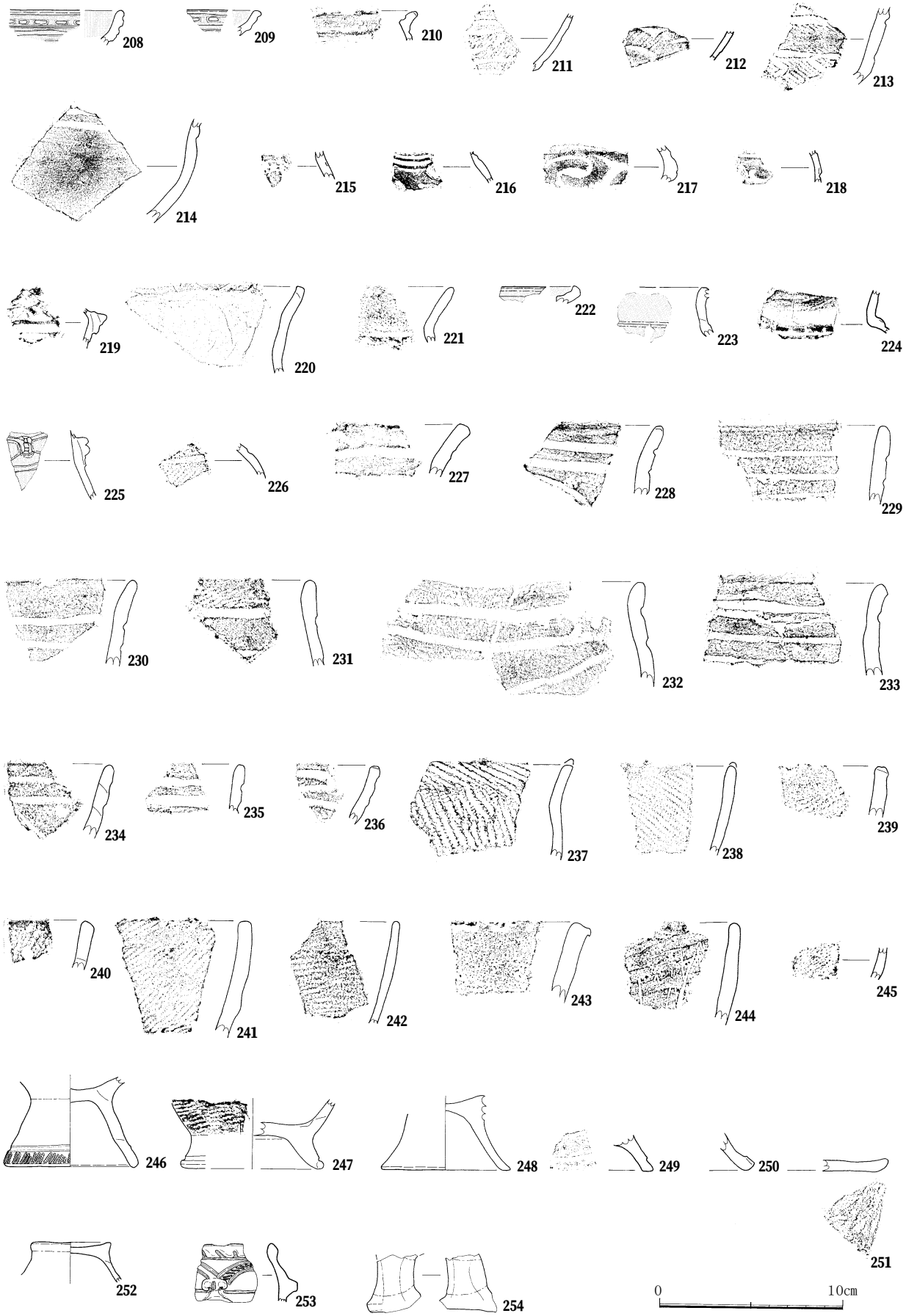
時期不明土器

中期または後期の縄文土器であると思われるが、明確な時期及び形式が不明であるものをここに一括



第13図　覆土出土遺物（1）

第14図　覆土出土遺物（2）



第15図　覆土出土遺物（3）

して紹介する。口縁直下から縦位に条痕を施すもの（69、105）。口縁部に縦横に櫛目による文様を描くもの（83、150、174）。口縁部に半截竹管による刺突を施し、胴部には縦位に絡縄体によると思われる間隔をとった縄文が施文されるもの（272）。円形または渦と菱形の磨消縄文が施されるもの（274）。波状の外反する口縁で、斜縄文が角度を変えて外面に全面施文されるもの（237）。縄文後期の狩猟文土器のように縄文を施さず、粘土紐の貼り付けにより文様を施しているもの（109、152）が出土した。

土製品

土偶および土偶と思われる破片が計４点出土している。（28）はSMP-03から出土したもので、胴部と左右の脚部のみである。両腕部と頭部は欠損しているが、乳房を表現した突起など、明らかに女性を形どったものと想定される。胴部の前面と背面、両側面に渦巻き状の文様が刻線によって施される。縄文時代晩期に特徴的な「小土偶」と言われる類の土偶かもしれない。（94）はSX-33から出土したもので、実測図上で上部に位置すると思われる部分が三角錐状の形態となる。両側の突起は先端を上下につまむ形となり、胴部の両面には逆三角形の凹面を形成している。（254）は土偶の脚部と思われる破片で、（28）と同様の土偶の脚と思われる。（253）は中空の遮光器土偶の顔面部と思われる破片である。浪岡地区での晩期の土偶出土例には中空の遮光器土偶はほとんど見られない。出土が覆土中からであり、篠原遺跡の遺物なのか不明な点もある。本遺跡または近隣の遺跡からの今後の出土例を待ちたい。

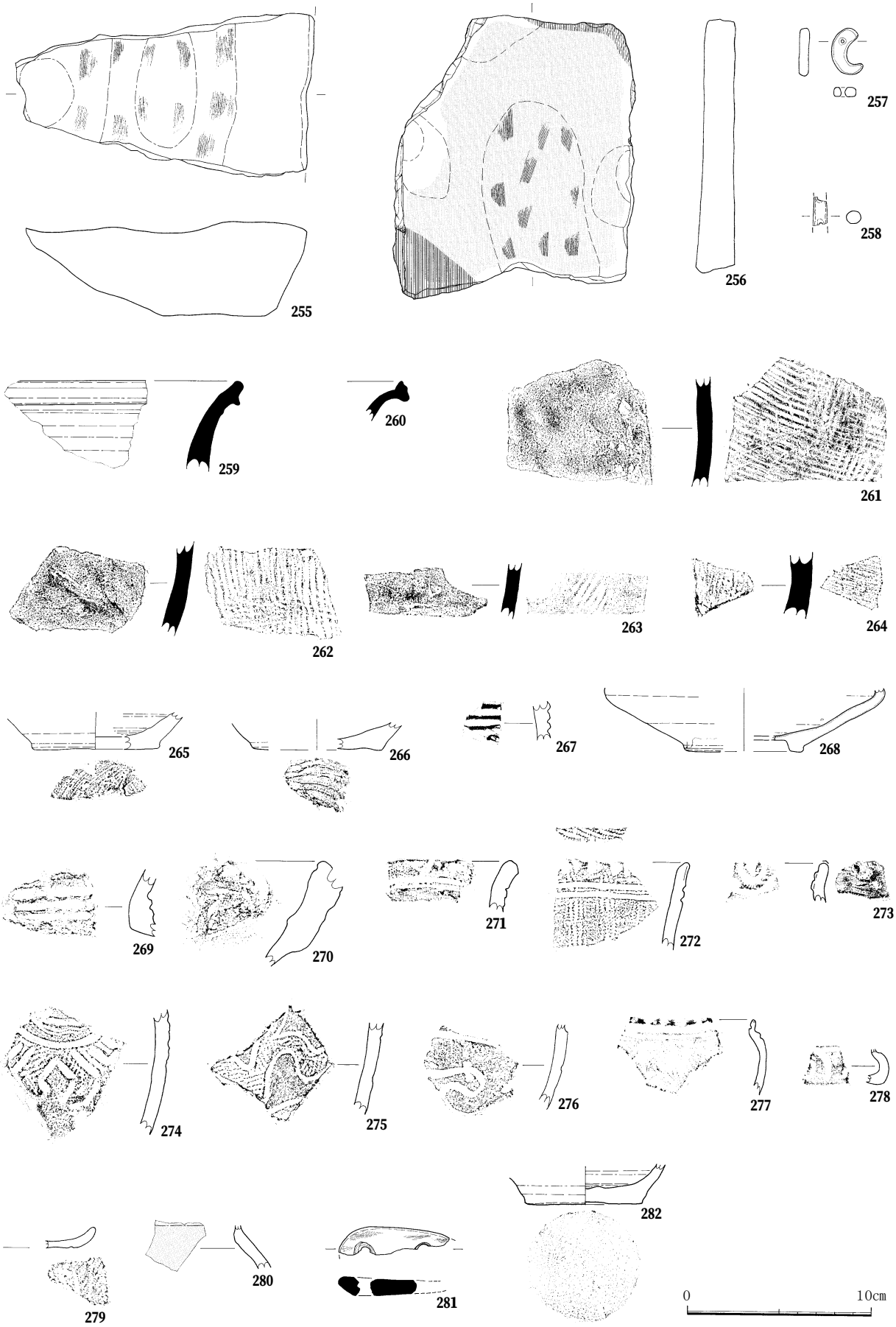
石器・石製品

石器は、遺構で検出するよりも覆土・表土・表採のいわゆる撹乱状態で検出するものが多かった。また、石匙や石箆など縄文遺跡で一般的に出土するような石器はほとんど出土しなかった。調査対象地が集落ではなかったためであろうか。

石鏃　石鏃は10点出土・表採した。頁岩によるものであるが、１点だけが白色を呈する。また、遺構から出土したものは（88）のみで、折れた基部の両面にアスファルトが付着している。基部の刳り込みが明瞭で小型のもの（288、290、291）と、比較的重く、基部の刳り込みが緩やかなもの（88、283、284、285、286、287、289）がある。

石鏃計測表（単位：㎜、g）

遺物№	出土地点・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	掲載図版等
88	K22・埋土	3.97	1.32	0.48	2.11	第９図・写真８
283	K21・覆土	3.64	1.49	0.53	2.71	写真12
284	K20・覆土	3.76	1.17	0.53	1.85	写真12
285	K21・覆土	2.72	1.39	0.39	1.33	写真12
286	K21・覆土	3.32	1.69	0.69	1.77	写真12
287	K24・覆土	4.11	1.54	0.67	2.49	写真12
288	K24・覆土	2.56	1.41	0.35	0.85	写真12
289	K22・表土	3.31	1.21	0.63	2.32	写真12
290	表採	1.84	1.17	0.38	0.62	写真12
291	表採	1.35	1.12	0.31	0.41	写真12



第16図　覆土・表土出土遺物及び表面採集遺物

剥片石器　遺構からの出土遺物はない。（写真 12）は全て表土及び覆土からの一括遺物である。一部に二次加工のある剥片も見られる。

礫石器　磨製石斧２点（113、126）は溝跡や柱穴内からの出土である。（113）には使用時の剥離と思われる痕跡が刃部及び側面に残る。（126）は刃部のみの出土であり、上部の 1/2 を欠損しているが、整形は良好で、側面の稜が明確に見て取れる。円盤状石製品は２点（35・58）出土した。いずれも両面の周囲を剥離して円形に成形している。一方向のみ鋭角に成形することで刃部を形成している。使用痕については不明である。石皿と思われる破片（255）は側面に被熱痕が見られ、上面と下面には磨耗した使用痕が認められる。石版状の破片（256）は火成岩の薄片で、一面に磨耗した使用痕と磨耗した周囲に赤色顔料が付着し、一部に焼成痕がある。石皿にしては薄く、使用に耐えられないかもしれない。

玉　玉と思われるものは３点出土している。（257）は覆土からの出土である。軟質の堆積岩を削って勾玉状に成形したもので、長さ 2.5 ㎝、幅 1.8 ㎝、厚さ 0.5 ㎝程度で、穿孔が一箇所見られる。円柱状を呈すると思われる破片（258）は両端に穿孔が認められる。当初は「玉」として扱ったが、全体形が不明であり、石質も火成岩の比較的粗いものであるため用途が不明である。また、同様に垂飾品と思われるが用途不明なものとして（281）がある。残存長６㎝程度の扁平な堆積岩に二ヵ所の穿孔を施し、穂摘み具状の形態を呈している。穿孔部には擦痕等の使用痕は認められない。

石製品計測表（長さ、幅、厚さについては実測図参照）

遺物№	出土地点・層位	重さ	掲載図版等
257	K-22・覆土	2.20	第 16 図・写真 12
258	K-24・覆土	0.67	第 16 図・写真 12
281	K-24・表土	7.10	第 16 図・写真 12
126	K-24・Pit-08	(113.87)	第 11 図・写真 9
113	K-24・SD-03	185.59	第 11 図・写真 9
35	K-21・SX-11	150.60	第 6 図・写真 7
58	K-21・SX-22	165.31	第 7 図・写真 8

2）古代以降の資料

古代以降の遺物の出土量は、今回の調査ではさほど多くはない。F 区の北側で古代の竪穴及び溝と思われる遺構を検出しているが、上層を削平されていると思われるため出土遺物量は極めて少ない。

須恵器

壺　壺は口縁部片（260）が出土した。報告書記載外でも個体数は多くない。

甕　大甕は、SX-15a で遺構底面から出土した破片（82）をはじめ、口縁部片（259）、胴部片（80、81、90、261、262、263、264）が出土した。うち（80、263）は酸化焼成により赤色を呈する。（80）

は内面に布目状の圧痕がある。（81）は内外面ともに同様のタタキ目が認められる。（82、90）は内面を上下にナデ調整を行っている。（262）は内面のオサエに石等の道具を用いているのであろうか、凹凸は残るものの文様として明確な痕跡が残っていない。

土師器

坏　内面黒色で暗紋が見られるもの（91）は、口径 12.7 ㎝を測る口縁部から胴部片で、比較的浅く開く器形となる。また、坏の底部片（147、282）は回転糸切底となるものである。出土量は少ない。

甕　口縁部は、外反して段を持つように口唇部を上に立ち上げるもの（5、14、125）と、同様に外反するが段を形成しないもの（92）がある。整形は良好で、胴部まで残る破片である（5）は内外面ともに胴部上半から縦位のヘラ調整が行われていることが明確にわかり、技法からは 10 世紀の甕と捉えられる。底部片は（93、132、265）の 3 点が出土している。底面はいずれもヘラによる調整が行われている。

瓦質土器

中世の瓦質土器である可能性を有するもの（267）が 1 点出土している。覆土からの一括遺物であり、小破片であるため全体形等については不明であるが、行火、手焙り、火鉢等の可能性があると思われる。

不明陶磁器

覆土から出土した皿（268）1 点である。腰から胴部にかけては外反するが、口縁部が直角近くまで立つ小皿で、内面全面と外面の腰下から口縁にかけて緑黄色の灰釉が施される。削り出しの高台部と高台裏は施釉されていない。胎土は灰色緻密で白色の砂粒が少量混ざる。見込みの一箇所にトチンの痕跡が残る。全体としては唐津の製品である可能性が考えられる。近世～近代にかけての遺物と思われる。

第５章　まとめ

本郷・吉内地区の農道整備事業に伴なう発掘調査は、昭和 50 年代初頭に行われた東北縦貫自動車道建設に伴なう発掘調査事業以来行われなかった同地区での発掘調査であるとともに、東北縦貫自動車道と同一の丘陵ではあるが、より低位部の様相を知ることのできる有意義な調査であった。

篠原遺跡周辺の歴史的環境としては、東北縦貫自動車道の発掘調査時に篠原遺跡を除く松元遺跡、杉ノ沢遺跡、吉内遺跡、が周辺の遺跡として扱われており、松元、杉ノ沢の２遺跡の発掘調査が行われている。今回の農道設置に関する調査成果と合わせてみると、篠原遺跡の南には縄文時代晩期の集落である松元遺跡があり、東には縄文後期から晩期の田ノ沢遺跡、西には縄文後期の良好な遺構・遺物を検出した中屋敷遺跡、北に古代の集落である吉内遺跡と縄文中・後・晩期から古代にかけての杉ノ沢遺跡があるなど、篠原遺跡を含めた本郷・吉内（浪岡地区の南東丘陵）地区は縄文時代中期から晩期及び古代の集落を中心に近世～現代までを含め（確認できない時代は残るが）長期間にわたって利用されてきた丘陵であることが理解できる。

今回の調査では東北縦貫自動車道から標高では 10 ～ 20m 低い丘陵の平坦部での発掘調査となったが、遺構の少なさにもかかわらず多くの遺物が出土し、前述のとおり周辺に大規模な集落遺跡の存在をうかがわせる結果となった。今回の調査では、主に縄文時代中期後半～晩期に至る遺物を中心に、縄文時代の遺構としては土器埋設遺構を検出することができた。調査対象地は全般的に後世（現代）の耕作による削平と撹乱を受けているが、そういった状況にあって、土器埋設遺構複数を確認できたことは幸いであった。その中でも、調査区内で竪穴建物跡や竪穴住居跡と思われる遺構は検出できず、一方で土器埋設遺構だけが検出できたことにより、縄文時代にこの一帯が墓域として利用されてきた可能性が考えられる。さらに、今回調査地の近隣に縄文時代後期～晩期の集落が存在していることをも想定させるものである。また、溝跡をはじめ、竪穴建物跡と思われる遺構は古代以降に比定されることから、この一帯が縄文時代に利用された後、ある一定の時間を経て、古代に利用され、現在に至る状況が理解された。

篠原遺跡の遺構検出状況では、縄文時代と判断できる遺構が土器埋設遺構の６基のみである。その他土坑も複数確認したが、時代を決定付けられる資料の出土や埋土の状態、遺構の確認状態にはなかったため、時期不明の遺構となっている。溝については、多くは古代の遺構であろうとの推定のみであり、確証は持てなかった。ただし、F 区で検出した溝は南東から北西へ流れるもの（SD-01・05・06）と北東から南西に流れるもの（SD-03、SX-02）の２種類に大別され、北側で隣接する吉内遺跡でも同様の傾向が認められたことから、一定規模以上で斜面に対し斜め角度を持って造られた溝については古代の溝である可能性を考慮すべきであると考える。

柱穴や性格不明遺構については溝跡よりも時期不明であった。調査区が狭小であったためもあるが、耕作による削平、撹乱が著しかったことが主因であろう。同様に狭小な調査となった北側の吉内遺跡及び西側の中屋敷遺跡よりも遺構数・密度ともに少ない状況であった。

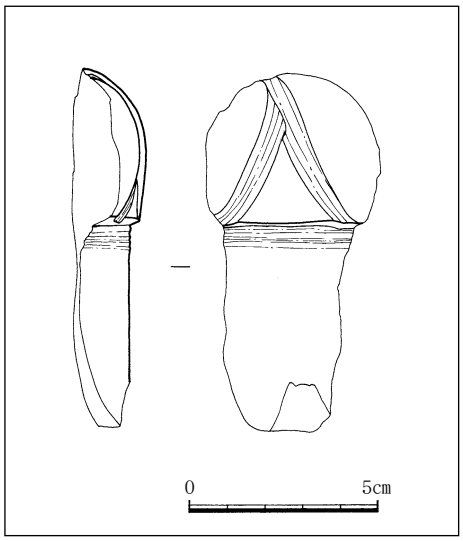
しかし、遺物は調査対象地の覆土及び表土から散布的に検出され、時期・時代ともに幅広い遺物構成となった。ただし、縄文中期の遺物は極めて少なく、円筒上層の口縁部装飾帯が数点出土したのみである。

遺構及び遺構面に伴なう遺物はなく、覆土・撹乱層からの出土ということで、篠原遺跡（周辺）の集落に縄文中期に遡るものがあるのかは疑問である。周辺の調査からも、松元遺跡で少量の縄文前期から中期の遺物は検出しているが遺構については不明であった。縄文後期から晩期にかけては、遺構・遺物ともに検出数が増大する。周辺でも中屋敷遺跡や田ノ沢遺跡、松元遺跡など良好な資料や遺構を検出していることから、篠原遺跡の範囲内でも集落が営まれていたであろうことが想定される。今後周辺の発掘調査を行う際には確認の必要が課せられるものと思う。

古代では、松元遺跡、吉内遺跡や中屋敷遺跡、杉ノ沢遺跡などをはじめとし、同一丘陵の北側延長上に源常平遺跡や羽黒平遺跡など 9 ～ 10 世紀の古代の集落跡が確認されており、浪岡地区の西側丘陵地に広がる遺跡群とともに大規模な集落を形成していたことが理解できる。ただし、今回の調査区からは古代の遺構と断定できるものは検出できなかった。削平による影響なのか、古代においても土地利用が居住区域と異なるのかは今回の調査からは判断できない。周辺地区全体において今後の調査時に残された課題である。

なお、隣接地については未調査であり不明な点も多いが、隣接する果樹園耕作者の方からは、近辺の丘陵地では昭和初期には縄文土器・石鏃などが多数表採でき、特に今回発掘調査を行った箇所から標高が若干高い部分からの遺物表採が多かったことをご教示いただいた。このことから、篠原遺跡の主要部は今回の調査対象地の東側の一段高い一帯であることも考えられる。篠原遺跡の範囲に含まれている部分ではあるが、現在果樹園地として利用されており当面開発予定はない。しかし、今後果樹の改植等で遺跡に影響を及ぼす可能性が高いため、遺跡の周知徹底を図るとともに、今後の利用状況等を定期的に確認する必要があると考えている。

第 17 図　参考：篠原遺跡出土とされる石製品



第６章　吉内遺跡と周辺の遺跡

吉内遺跡は浪岡町の東側丘陵地末端部に所在し、標高 36 ～ 50m の斜面である。この場所は吉内川左岸に当たる。

遺跡として周知された年は昭和 53 年（1978）で、同年 10 月刊行の青森県遺跡地図・遺跡地名表に記載されている。それ以前、昭和 40 年代前半に遺跡西端部のリンゴ園から土師器が農作業中に採集されている。また、平成 7 年（1995）5 月に浪岡町史編さんのため現地踏査した際、土師器や須恵器が採集されている（1996・『浪岡町史研究年報』Ⅰ）。

遺跡の範囲は杉ノ沢遺跡西端部から吉内川に沿った傾斜地一帯と考えられる。

杉ノ沢遺跡（図の 2）

吉内遺跡の東端に接し、標高 80 ～ 50m の丘陵地及びその斜面である。

昭和 52 年（1977）に東北縦貫自動車道予定地を青森県教育委員会が発掘調査を実施した。その際第 1 区･第Ⅱ区･第Ⅲ区と区分して発掘調査をし、各区ごとに分けて報告書（1979 年刊行）に記載されている。しかし、第Ⅰ区と第Ⅱ区・第Ⅲ区とは地形的に異なっており、また大字名も違っている。第Ⅰ区を当該遺跡とし、第Ⅱ区・第Ⅲ区は桃里遺跡と呼称すべきであると考える。

昭和 52 年の発掘調査では縄文時代中期後葉の竪穴住居跡 1 軒、平安時代中期頃の竪穴住居跡 5 軒のほか、縄文時代の土坑 28 基などが検出されている。

また堆積土からは縄文時代早期末から前期初め頃の土器や後期の土器､続縄文土器なども出土している。

遺跡の範囲は地形的にみて前述の発掘調査地点の東側丘陵地及び南側が含まれ、吉内川右岸は含まれないものと考えられる。

桃里遺跡（図の 3）

前述の杉ノ沢遺跡発掘調査報告書における第Ⅱ区及び第Ⅲ区から西側及び南側が遺跡範囲である。吉内川右岸の平坦地で現状はリンゴ園である。この範囲内からは土師器・須恵器、縄文土器・石器などが表面採集されている。また五輪塔の一部分が以前より所在し、近年中世陶磁器の破片が採集されている。

前述の発掘調査では、平安時代の遺構・遺物が多く、縄文土器・石器及び中世陶器や近世の銅銭も多くはないが、出土している。

中屋敷遺跡（図の 4）

吉内遺跡の南西方向に在り、丘陵地末端部に立地している。篠原遺跡は東側に接している。

平成 14 年（2002）に農道改良工事に先だち、浪岡町教育委員会が発掘調査を実施している。この発掘調査では縄文時代後期後半期の土器を伴う竪穴住居跡や平安時代の住居跡の一部分が検出されている（2003 年・『浪岡町文化財紀要』Ⅲ）。

篠原遺跡（図の 5）

本郷川右岸丘陵地末端部に所在し、標高は 35 ～ 70m の場所である。発掘調査は実施されていないが、水田地との境界に掘り込んだ用水路を建設した時に縄文土器や弥生土器が出土したと伝えられている。

西側は中屋敷遺跡、北側が吉内遺跡と接している。

松元遺跡（図の 6）

本郷川左岸の丘陵地に所在し、標高は 50 ～ 100m の場所である。

昭和 52 年（1977）に東北縦貫自動車道予定地を青森県教育委員会が発掘調査を実施した。その結果縄文時代晩期の竪穴住居跡 1 軒、平安時代の竪穴住居跡 23 軒、掘立柱建物跡 1 棟などの遺構が検出された。このほか縄文時代早期から晩期まで各期の土器や北海道に分布する続縄文土器（江別 C2 式）も出土している（1979 年刊行の報告書より）。

なお、平安時代の竪穴住居跡のうち竪穴部のカマド構築壁を除く 3 方に溝が巡っているものが 13 軒ほど検出されている。このような住居跡は青森市内や津軽地域でみられるものであり、外周溝と掘立柱が付随するものや三方を盛土で囲むものなどとともにその分布や構造・出土品などを調べる必要がある。これらを同一なものと見る前に分けて考察すべきである。

源常平遺跡（図の 7）

浪岡川と支流の正平津川に挟まれた丘陵地末端部で、標高 50 ～ 90m の場所に所在している。

昭和 51 年（1976）に東北縦貫自動車道予定地内を青森県教育委員会が発掘調査を実施した。報告書（1978 年刊行）によると調査の結果、縄文時代後期後半の竪穴住居跡 2 軒、縄文時代晩期の竪穴住居跡 4 軒と土坑墓 24 基、平安時代 72 棟と掘立柱建物跡 1 棟、中世館跡に伴うと思われる空堀 2 条などが検出されている。

また、遺構外からは縄文時代早期（寺の沢式、物見台式）、前期（春日町式、円筒下層式 d2）、後期（十腰内Ⅰ式）、晩期（大洞 B・B-C、C1、C2、A 式）の土器や石器、土師器、須恵器、中世陶磁器などが出土している。

細野遺跡

正平津川右岸丘陵地及び斜面を含む範囲で、標高は 120 ～ 180m の場所である。

昭和 28 年（1953）に早稲田大学が発掘調査を実施し、斜面から縄文時代晩期の土器を多量に発掘している。『浪岡町史』第 1 巻に細野遺跡出土土器の写真を掲載している（2000 年、成田誠治「先史時代の生活」）。

平成 8 年（1996）と同 9 年（1997）には県立郷土館が発掘調査を実施した。その結果は『青森県立郷土館年報』21 号に掲載されている。それによると縄文時代早期の貝殻文土器（寺ノ沢式）や石器が出土したほか縄文時代晩期の大型掘立柱建物跡の 1 部分が検出されている（1997、福田友之ほか「浪岡町

細野遺跡発掘調査報告書」)。

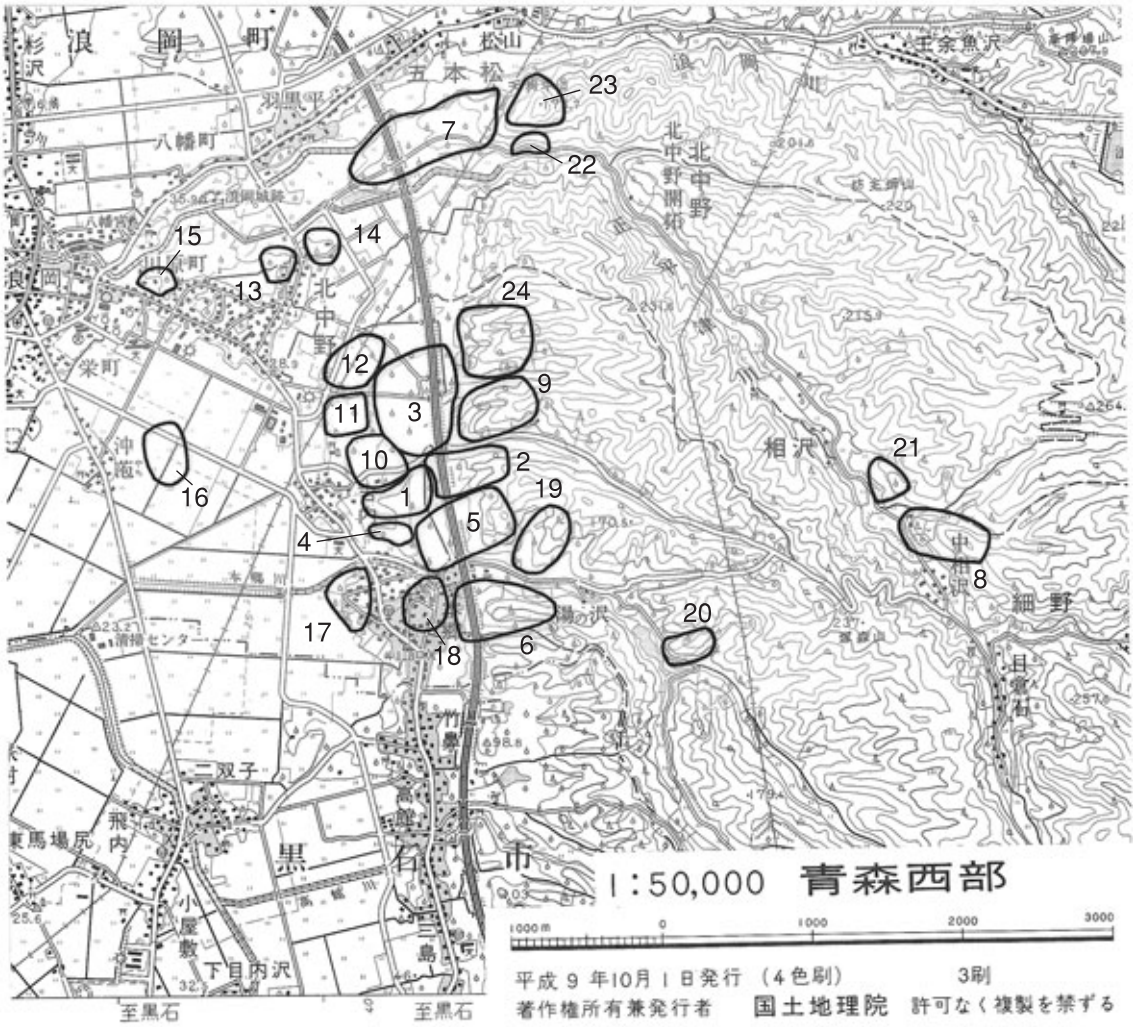
吉内遺跡に隣接する遺跡としては吉内川右岸丘陵地に博奕打ヶ沢遺跡がある。桃里遺跡の東側に当たり、畑地耕作中に縄文土器が出土している。東北縦貫自動車道の着工前に発掘調査された遺跡では縄文時代や平安時代の竪穴住居跡や墓坑などが検出されているが、遺構の外から出土した土器や発掘調査前に表面採取された土器などを見ると縄文時代早期から晩期までの各期、弥生時代及び続縄文土器、平安時代、中世、近世の遺物がある。発掘調査地点では明確に遺構に伴わないが、その周辺にはそれらの時期の遺構があるはずである。人々の生活圏は何時の時代でも狭いものではないはずである。

吉内稲荷神社の東側のリンゴ園では桃里遺跡に至る場所まで、かつて土師器や須恵器のかなり大きな破片を捨ったことがある。広範囲な平坦地域が遺跡として括られる。

また、昭和50年代以降現状が変わっている地域も所々にみられる。水田がりんご園に造成され、水路や窪地が埋められ畑地の拡張が図られるなど地形が人為的に変更されている。県内の動向として平安時代後半期から防禦的施設が構築されていることが最近解明されてきた。旧五郷村地域で遺跡として周知する場所はさらに増えるものと思われる。

津軽平野における遺跡分布をみると縄文時代早期から中世に至るまで東側の山際にひとつのまとまりがある。碇ヶ関村から大鰐町、平賀町、尾上町、田舎館村、黒石市を経て浪岡町に通じる道があったのではないかという想定が東北縦貫自動車道に関係する遺跡分布調査や試掘調査、さらには発掘調査によってなされ得る。青森市とは浪岡川をさかのぼっていくと連らなる。このルートでの交流、人の移動があったものと想定するものである。

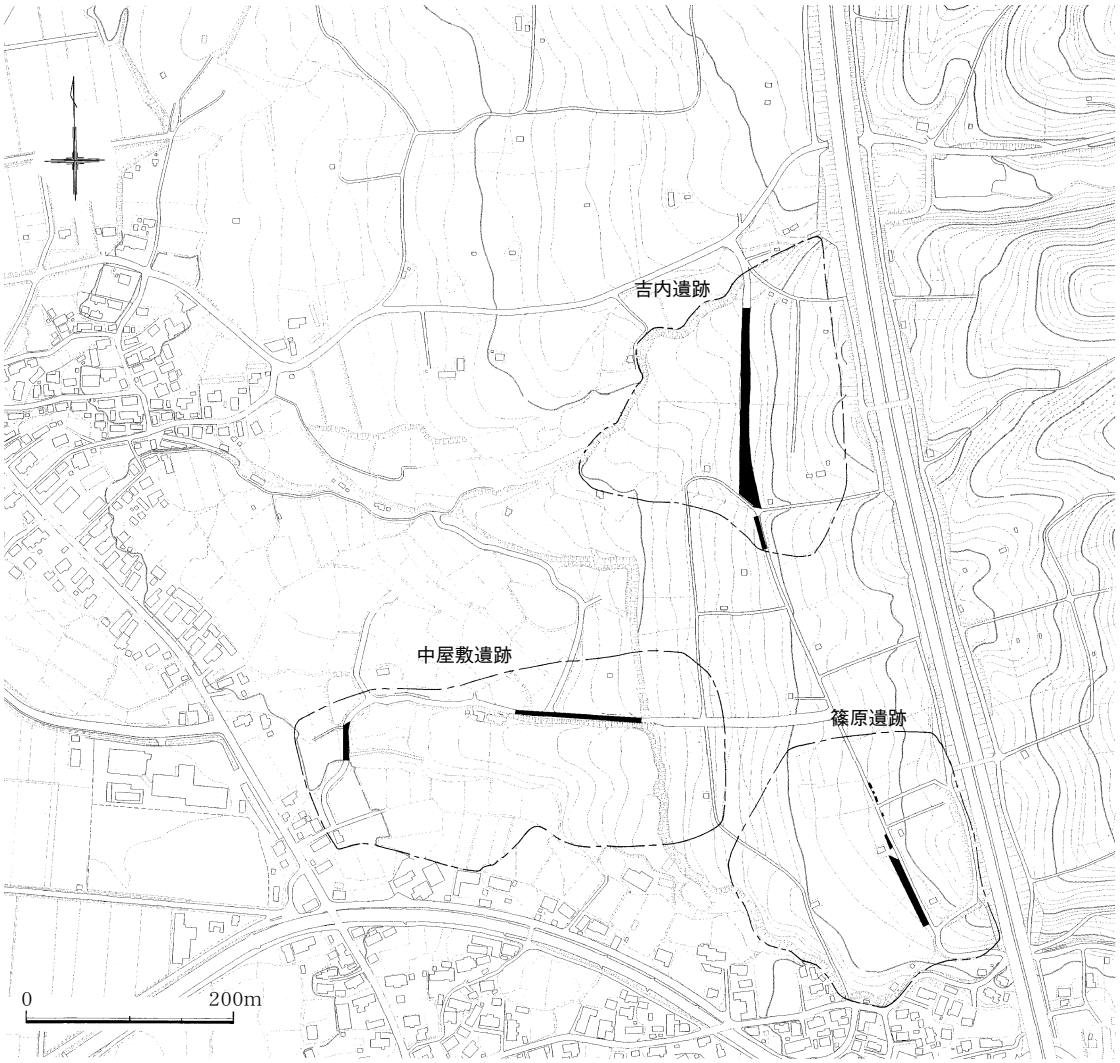
（成田誠治）



1	吉内遺跡	9	博奕打ヶ沢遺跡	17	本郷遺跡
2	杉ノ沢遺跡	10	山下遺跡（新規）	18	本郷館遺跡
3	桃里遺跡	11	桃里（2）遺跡（新規）	19	田ノ沢遺跡
4	中屋敷遺跡	12	桃里（3）遺跡（新規）	20	牧ノ沢遺跡
5	篠原遺跡	13	浪岡崎（1）遺跡	21	正平寺遺跡
6	松元遺跡	14	浪岡崎（2）遺跡	22	春日社遺跡
7	源常平遺跡	15	川原館遺跡	23	天狗平遺跡
8	細野遺跡	16	沖林遺跡	24	王田館遺跡

第７章　県営本郷地区ふるさと農道緊急整備事業に係る緊急発掘調査報告（中屋敷遺跡・吉内遺跡・篠原遺跡）の総括

県営本郷地区ふるさと農道緊急整備事業に係る発掘調査は、浪岡町教育委員会が平成 14 年に実施した中屋敷遺跡（『浪岡町文化財紀要Ⅲ』）、平成 16 年に実施した吉内遺跡（『浪岡町文化財紀要Ⅴ』）、本年浪岡教育事務所が実施した篠原遺跡と３遺跡について行われた。今年度、事業が完了することから、再度本地区における調査成果をまとめ、浪岡吉内・本郷地区における遺跡の在り方を概観する。



調査区を■にて表示

1）中屋敷遺跡

地　　番　青森市浪岡大字吉内字山下地内

調査面積　324 ㎡

調査期間　平成 14 年７月２日～９月 30 日

調査内容　発掘調査は、沖積平野から一段高くなった舌状台地の突端に当たる西側斜面（A 区）と台地中央部（B 区）の２地点を対象に実施した。標高は 30.5 ～ 32.5m ほどである。

遺構は縄文時代後期から古代を中心に検出され、遺物は縄文時代後期から 15 世紀の中国製白磁小杯や

近世の肥前染付まで、幅広い時代の遺物が出土した。A 区からは、縄文時代後期後半の住居跡 2 棟、古代（9 ～ 10 世紀）の住居跡 2 棟、縄文時代の遺物包含層などを検出した（B 区は散布地）。

特筆すべきは、縄文時代後期後半の住居跡のうち、南北 455 ㎝、東西約 500 ㎝の円形を呈する焼失住居跡である。南側に出入り口部、中央部に主柱穴 4 基を検出し、埋土及び床面からは貼瘤の付いた注口土器 3 点、台付土器 1 点、深鉢形土器 1 点、無頸壷形土器 1 点などの一括遺物が出土している。

遺物包含層は、台地から水田面に至る落ち込み部分で検出され、土師器・須恵器等が混在するⅠ・Ⅱ層、縄文時代の遺物だけが出土するⅢ・Ⅳ層、地山からの漸移層であるⅤ層に分層できた。主にⅢ層から香炉形土器、注口土器、有頸・無頸の壷形土器、台付土器、粗製・精製の深鉢形土器、筒形土器、石鏃・石匙などの剥片石器が出土している。遺跡の特徴として、注口土器の出土が際立って多いことがあげられる。

これらの一括資料は、入組文・貼付瘤等の特徴から十腰内Ⅲ・Ⅳ群の土器と理解される。また、大波状口縁を持ち、扁平突起を有する精製深鉢形土器（報告書中ではＡⅠａ類と報告）は、東北南半における「西ノ浜式」に対応できるとして、西ノ浜式新段階併行期に相当する、と報告されている。

2）吉内遺跡

地　　番　青森市浪岡大字吉内字山下地内

調査面積　1700 ㎡

調査期間　平成 16 年 7 月 26 日～ 11 月 25 日

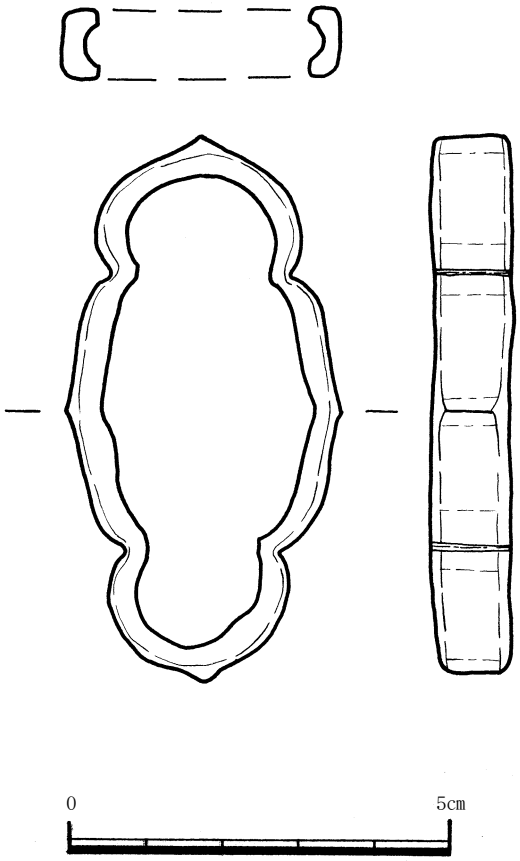
調査内容　調査対象地は中屋敷遺跡よりも一段高い、標高 46 ～ 48m ほどの西向きの緩斜面である。調査区北側は広範囲にわたって撹乱を受けており、遺物が散布的に検出される以外、遺構は確認できない状況であったが、中央部では遺構が良好に残る状況であった。結果、住居跡 9 棟、井戸跡 2 基、溝跡 20 条、柱穴跡 91 基、性格不明遺構（土壙の可能性のある 1 基を含む）39 基を検出した。

遺物などから、この集落跡は主に 9 世紀末から 10 世紀にかけて営まれたと考えられるが、注目すべきは、9 世紀末と考えられる住居跡から、大刀鐔と思われる銅製品が出土したことである（次頁挿図参照）。

この遺物については近畿圏の影響を多大に受けた葵形の透かし鐔である可能性が高いというコメントとともに、非破壊成分析結果から純銅製品であるという報告を得ている（詳細は『浪岡町文化財紀要Ⅴ』参照）。当時、京を中心とした律令国家の外に位置していたこの地においても、律令国家の影響を受けた「人」もしくは「文物」の交流が行われていたことを想定できる資料として、意義深いと考える。

また、遺構の残存状況が良好であったことから、建物構造を推定できる住居跡を複数検出した。建物内部（壁際）に巡らされた溝に土留めのための板材が埋設された痕跡を確認できたため、腰板の厚さや幅、埋設した角度などを観察することができた。更に、カマドとは異なる構造の燃焼施設を持つ住居跡など、集落内における建物の多様な在り方を考察することができた。

一方、遺物については、古代の土器が主体となるが、縄文時代草創期から中世に至るまでの遺物が見られた。先述の銅製品の他、所謂「北陸型」と通称される土師器甕や西日本で特徴的な「黒色土器」に類似した坏など、他地域の影響を受けたと考えられる遺物が多く出土した。在地の土器を使いながらも、他地域と交流していた当時の人々の生活を窺い知ることができる。



3）吉内・本郷地区における遺跡の展開

吉内・本郷地区は縄文時代草創期からの遺物が採取され、継続して利用されてきた土地と考えることができる。しかし、東北縦貫自動車道の調査及び本農道整備事業に係わる調査からは、この地に集落が営まれるのは縄文時代中期後半からであり、縄文時代後期に入ると中屋敷遺跡で報告されるように青森県津軽地方で見られる十腰内式とは異なる特徴を持った土器をも併せて使用する様相が見られる。

この時期の遺構としては、中屋敷遺跡で検出された住居跡や包含層などがあるが、遺物は篠原遺跡・中屋敷遺跡で土器・石器等が採取できる状況であり、遺跡の位置する丘陵地で生活ないし活動が行われていたことを想定できる。縄文時代晩期以降､弥生時代に確実に比定される遺構は各調査で検出されなかった。

この時期、浪岡地区内の近隣では、松元遺跡や羽黒平（3）遺跡など縄文時代晩期に盛行する遺跡も見られる。但し、弥生時代の遺物は、浪岡地区の東側丘陵地においても量は多くないが散布的に検出できることから、浪岡本郷地区でも、まだ調査の手が入っていない一帯に活動の場があった可能性も考慮しなければならない。弥生時代には南津軽郡田舎館村所在の垂柳遺跡に代表されるように、津軽地方においても低湿地地帯に主に稲作を生業とする集落が広がっていたとするならば、中屋敷遺跡の位置する標高 30m より低い低湿地、もしくは逆に遺物の表採例が多く報告される標高 50 ～ 60m 程度の高標高地帯に居住の中心があることも考えられよう。

本郷・吉内地区が再び大きく活用されるのは、9 世紀から 10 世紀にかけてである。

現在までの発掘調査成果から、9 ～ 10 世紀の浪岡地区では梵珠山から津軽平野へと連なる西側の丘陵

地緩斜面に山本遺跡をはじめ、野尻（1）～（4）遺跡、国史跡高屋敷館遺跡、山元（1）～（3）遺跡が展開し、丘陵地全体が巨大な集落を形成する状況にあったことが判明している。一方で今回調査を行った八甲田山から連なる丘陵地も同時期に集落が存在していることが知られていたが、残念なことに調査件数も少なく不明確なままであった。今回の農道整備に伴なう発掘調査では、中屋敷遺跡の調査において古代の住居跡が 2 棟検出されたが、検出位置が台地の突端部であり、集落の分布状況については曖昧なままであった。その後、吉内遺跡の調査が行われ、9 世紀末から 11 世紀にかけての住居跡と遺物が多数検出されるに及んで、東側丘陵地においても、西側丘陵地と同時期に集落が広がっていたことが想定できるようになった。但し、両方の丘陵ともに道路新設や農道整備対象地のみの調査であることから、調査が狭い範囲に限られ、特に東側丘陵地並びに本郷地区全体の動向については十分に把握できたわけではない。

また、地域と遺構、出土遺物の差異についての問題も残る。西側の大釈迦丘陵地には大規模な集落が、五所川原市の須恵器古窯跡群と一部連動しながら展開していったと考えられ、土鈴や錫杖状鉄製品といった特有の遺物が出土するが、今回調査の東側丘陵地からはそれらの遺物は極めて少なく、逆に近畿地方や北陸地方の影響を受けたと考えられる土器や大刀鐔と想定される銅製品が出土するなど、集落の性格もしくは居住する人の出自・生業等に違いがあったが、性格を変えながら浪岡地区全体に居住範囲が拡大していった可能性が考慮される結果となった。

さらに、11 世紀段階での環壕集落の有無につての問題も今後の検討課題としてあげなければならない。浪岡地区には 11 世紀を代表する遺跡として国指定史跡「高屋敷館遺跡」がある。しかし、同時期の集落遺跡の検出例はその直前の時期に比較して極めて少なく、全容がつかみきれない状態である。もし、11 世紀に特徴的に出現する環壕集落が各地域に存在するならば、本郷・吉内地区周辺にも構築されていた可能性が考えられる。また、前世紀からの遺構や出土遺物の差が地域差として出るのであれば、環壕集落の立地条件や形態（集落形態）も地域により異なる可能性を考えるべきかもしれない。

参考文献・引用文献

『青森県埋蔵文化財調査報告書第 39 集　源常平遺跡発掘調査報告書』 1978　青森県教育委員会
『青森県埋蔵文化財調査報告書第 44 集　羽黒平遺跡発掘調査報告書』 1979　青森県教育委員会
『青森県埋蔵文化財調査報告書第 45 集　浪岡町杉ノ沢遺跡発掘調査報告書』 1979　青森県教育委員会
『青森県埋蔵文化財調査報告書第 46 集　松元遺跡発掘調査報告書』 1979　青森県教育委員会
「浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書第 9 集　中屋敷遺跡発掘調査報告書」
『浪岡町文化財紀要Ⅲ』2003 浪岡町教育委員会
「浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書第 14 集　吉内遺跡発掘調査報告書」
『浪岡町文化財紀要Ⅴ』2005 浪岡町教育委員会

発　掘　調　査　抄　録

<table>
<tr><td>ふ り が な</td><td colspan="8">しのはらいせきはっくつちょうさほうこくしょ</td></tr>
<tr><td>書　　名</td><td colspan="8">篠原遺跡発掘調査報告書</td></tr>
<tr><td>副　書　名</td><td colspan="8">― 県営本郷地区ふるさと農道緊急整備事業に係る緊急発掘調査 ―</td></tr>
<tr><td>巻　　次</td><td colspan="8"></td></tr>
<tr><td>シリーズ名</td><td colspan="8"></td></tr>
<tr><td>シリーズ番号</td><td colspan="8"></td></tr>
<tr><td>編 著 者 名</td><td colspan="8">木村浩一・竹ヶ原亜希</td></tr>
<tr><td>編 集 機 関</td><td colspan="8">青森市教育委員会浪岡教育事務所</td></tr>
<tr><td>所　在　地</td><td colspan="8">〒038－1311　青森県青森市浪岡大字浪岡字稲村101－1　tel. 0172－62－3004</td></tr>
<tr><td>発行年月日</td><td colspan="8">2006年３月24日</td></tr>
<tr><td>所収遺跡名</td><td>所　在　地</td><td colspan="2">コード</td><td>北緯</td><td>東経</td><td>調査面積</td><td>調査期間</td><td>調査原因</td></tr>
<tr><td rowspan="2">篠 原 遺 跡</td><td rowspan="2">青森市浪岡大字本郷字田ノ沢</td><td>市町村</td><td>遺跡番号</td><td rowspan="2">40°
41′
44″</td><td rowspan="2">140°
37′
20″</td><td rowspan="2">250㎡</td><td rowspan="2">6月13日
～
8月10日</td><td rowspan="2">農道整備事業</td></tr>
<tr><td>02364</td><td>29041</td></tr>
<tr><td>所収遺跡名</td><td>種　　別</td><td colspan="2">主 な 時 代</td><td colspan="2">主 な 遺 構</td><td colspan="3">主 な 遺 物</td></tr>
<tr><td>篠 原 遺 跡</td><td>散布地</td><td colspan="2">縄文（後・晩）時代、古代</td><td colspan="2">土坑・溝跡ほか</td><td colspan="3">縄文土器・縄文石器・土師器・須恵器・土偶・石製品・鉄製品・などテンバコ15箱</td></tr>
<tr><td>特 記 事 項</td><td colspan="8">・縄文時代中期～晩期及び古代の須恵器、土師器など多数の遺物が出土した。
・縄文時代晩期と思われる埋設土器を数基検出した。</td></tr>
</table>

A～E区調査前

A区完掘

B区完掘

C区完掘

D区完掘

写真１　A～D区調査状況

E区完掘

北側作業風景

F区調査前

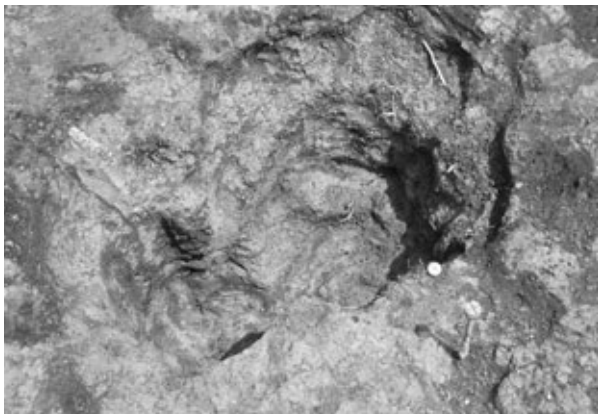
F区北側完掘

F区南半完掘

写真２　E～F区調査状況

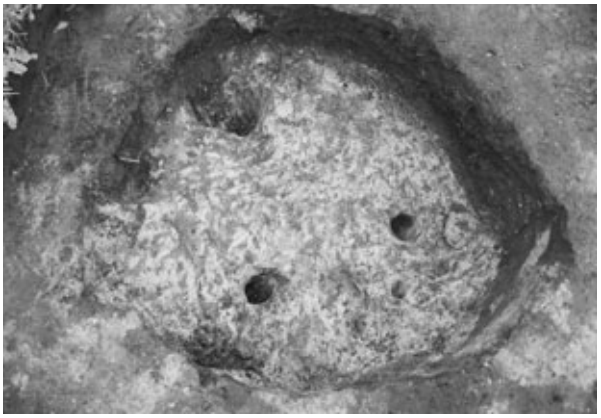
南側作業風景

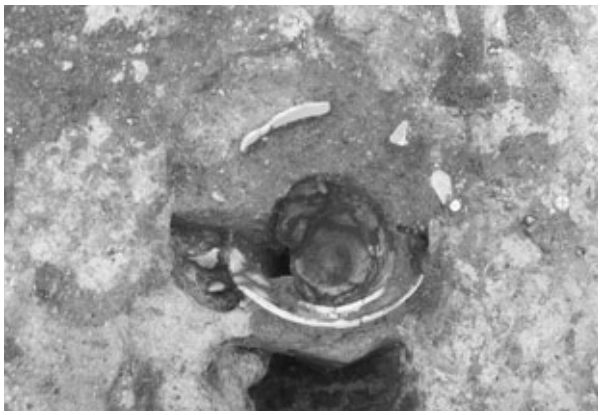
SD-01・SX-03・SX-05・SX-08完掘


SMP-01・04完掘

SMP-02・SX-10完掘

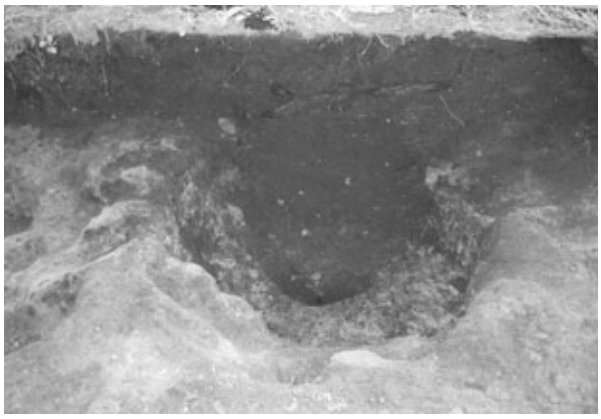
SMP-03確認状態


SMP-03・SX-11完掘


SMP-04埋設土器出土状態

SMP-05完掘

写真３　F区検出遺構


SMP-06完掘

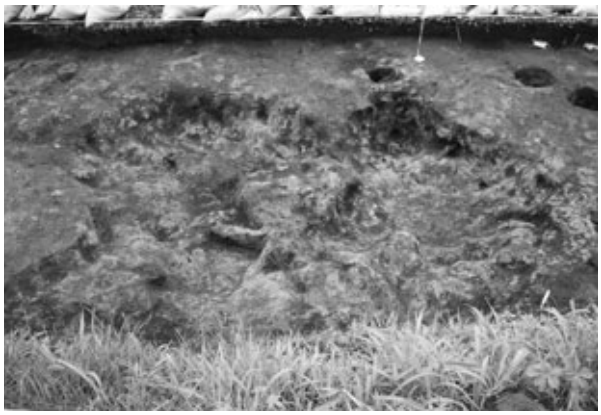
SD-01・SX-01・SX-08完掘

SD-03・SX-20完掘、SX-30

SD-03・SD-04・SX-20完掘

SD-05・SD-06・SX-36完掘

Pit-01・Pit-02完掘


Pit-01・Pit-02・Pit-06・SX-14a・14b完掘

Pit-06・Pit-10・SX-14a・14b完掘

写真 4　F区検出遺構

SX-02調査状態

SX-06・SX-07完掘

SX-08完掘

SX-09完掘・SMP-01半截・SMP-04確認状態

SX-15a・b遺物出土状態・Pit-05確認状態

SX-16完掘

SX-17完掘

SD-05・SD-06・SX-19・SX-35完掘

写真５　F区検出遺構

SX-20完掘

SX-22完掘

SX-23完掘

SX-31完掘

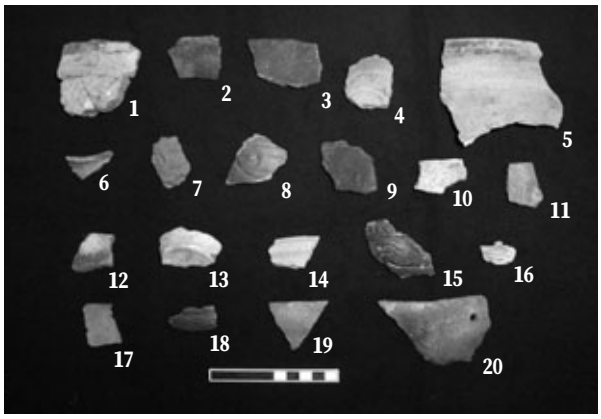
SX-32完掘

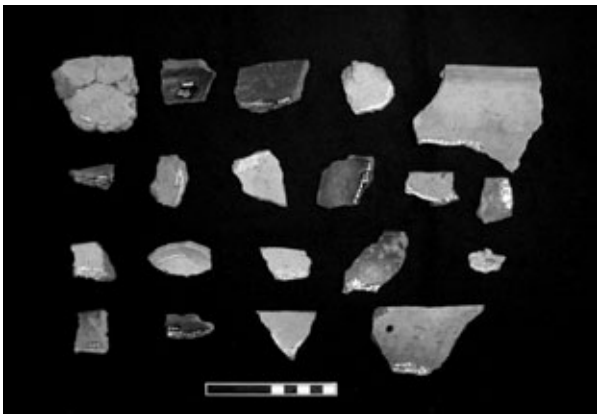
SX-33完掘

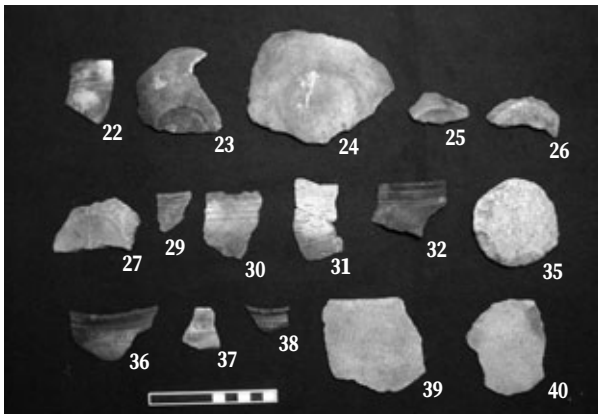
SD-05・SD-06・SX-35完掘

SD-05・SD-06・SX-35・SX-36完掘

写真 6　F区検出遺構

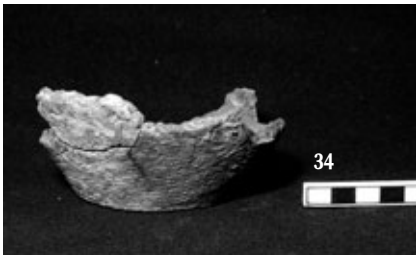

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20

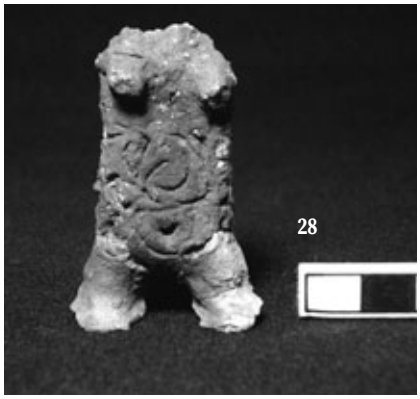



22
23
24
25
26
27
29
30
31
32
35
36
37
38
39
40

21

33

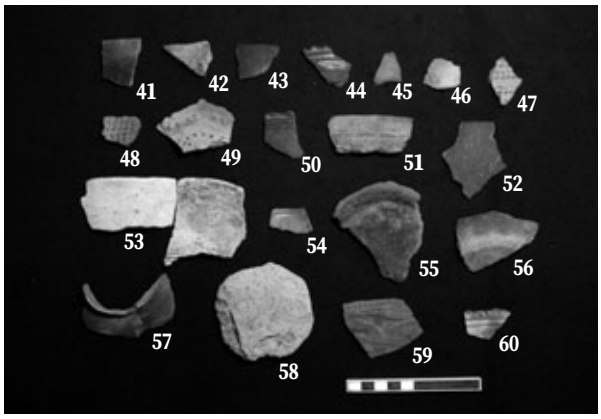

34

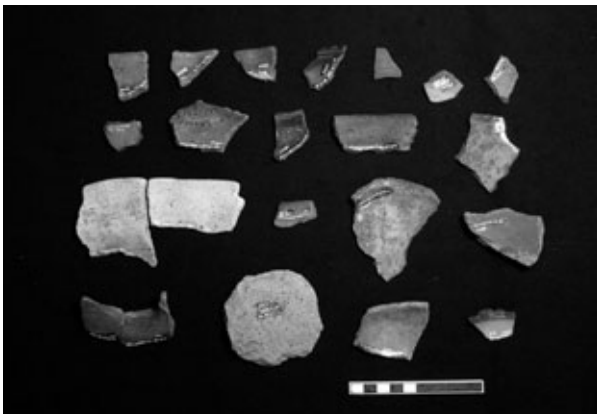

28

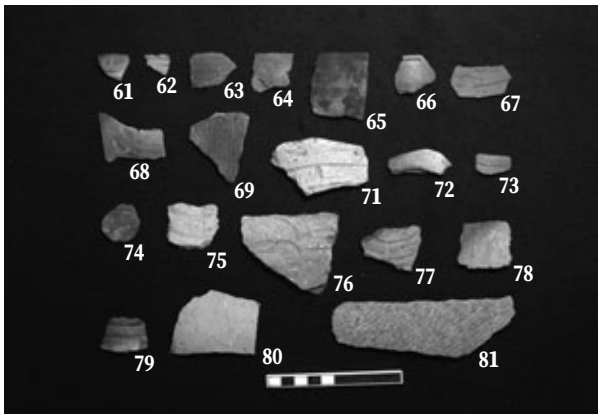
28

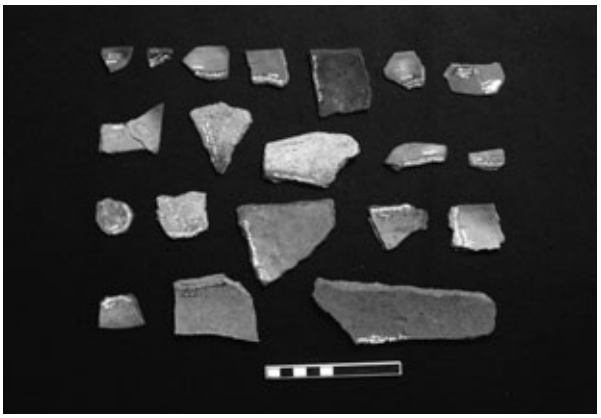
28

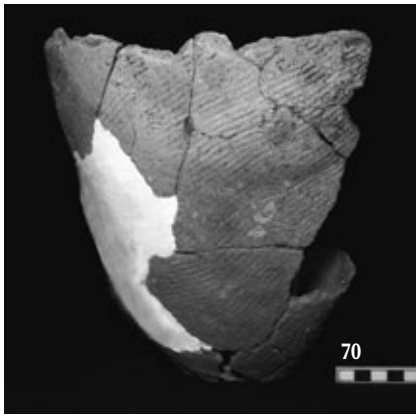
写真７　出土遺物


41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60




61
62
63
64
65
66
67
68
69
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81




70

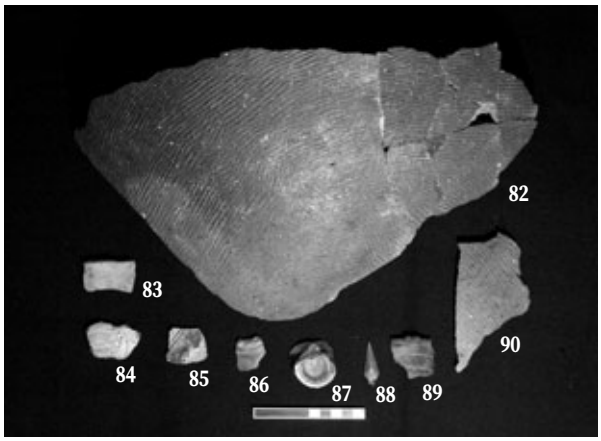
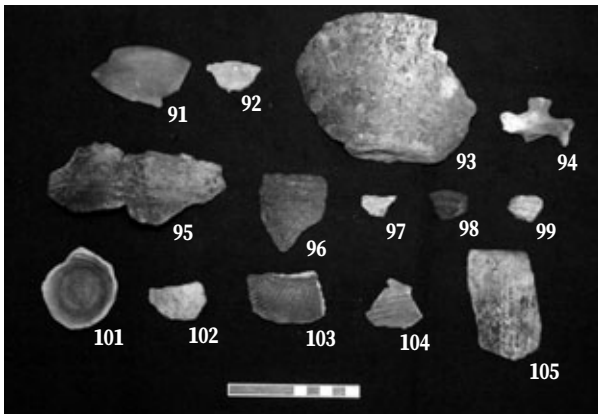
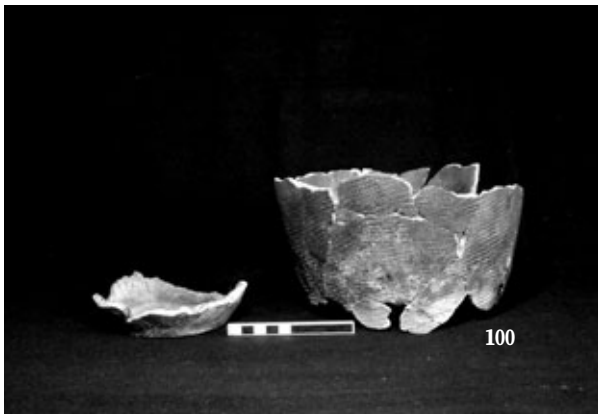
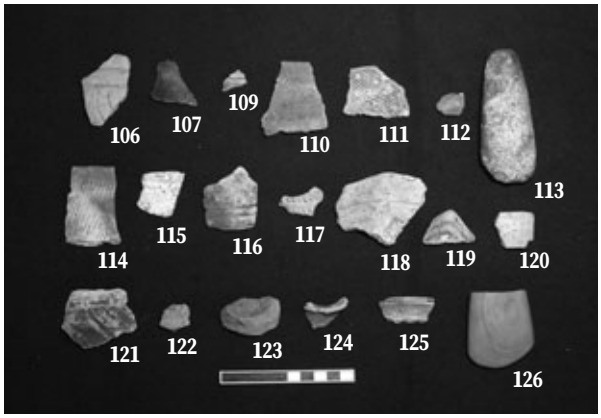

82
83
84
85
86
87
88
89
90

写真８　出土遺物


91
92
93
94
95
96
97
98
99
101
102
103
104
105


100

108


106
107
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126

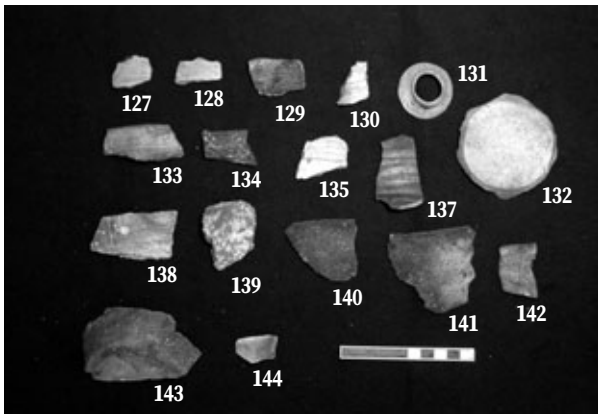
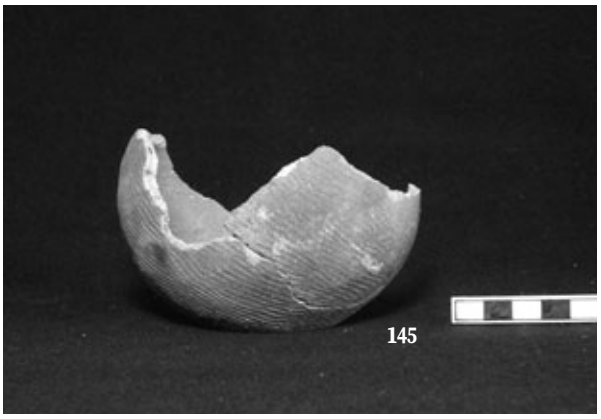
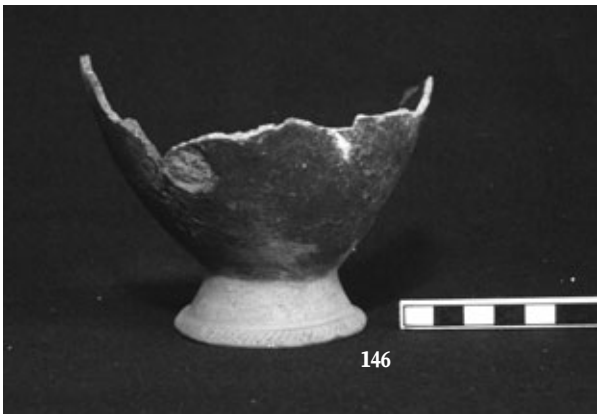
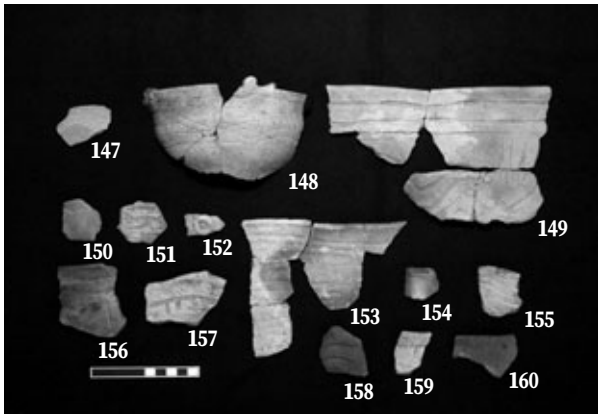

127
128
129
130
131
132
133
134
135
137
138
139
140
141
142
143
144

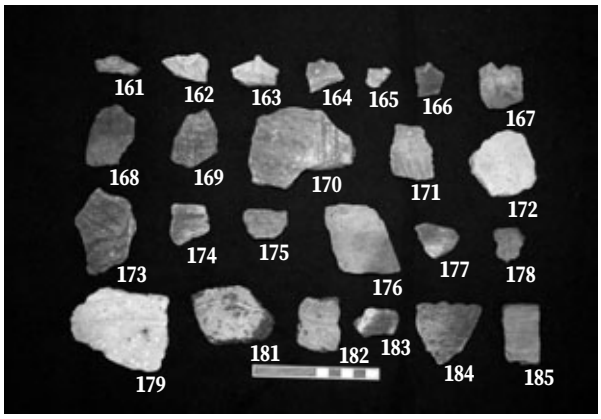
写真９　出土遺物

136


145


146


147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160


161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
181
182
183
184
185

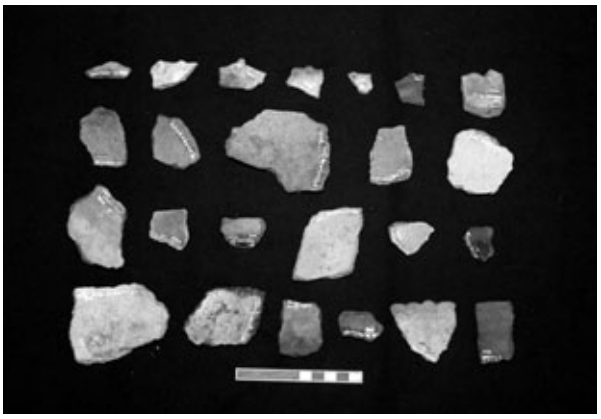
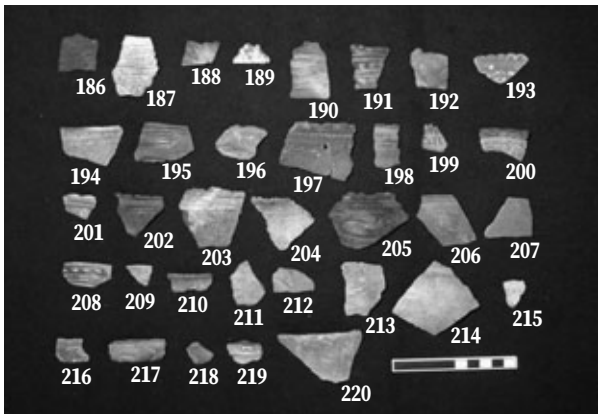
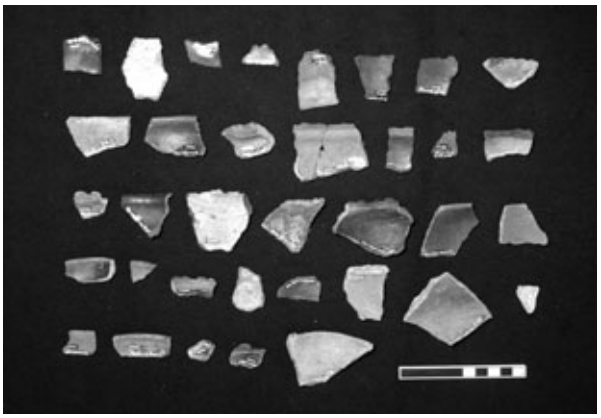
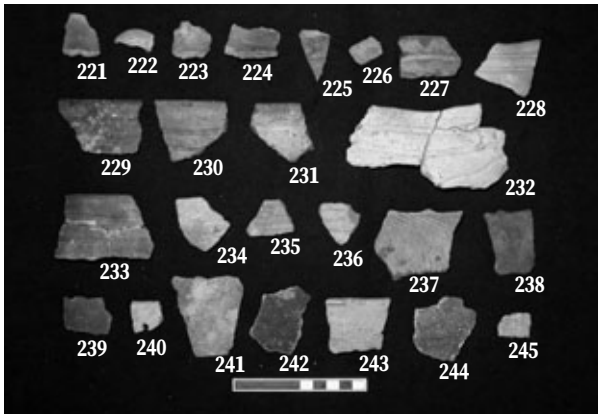


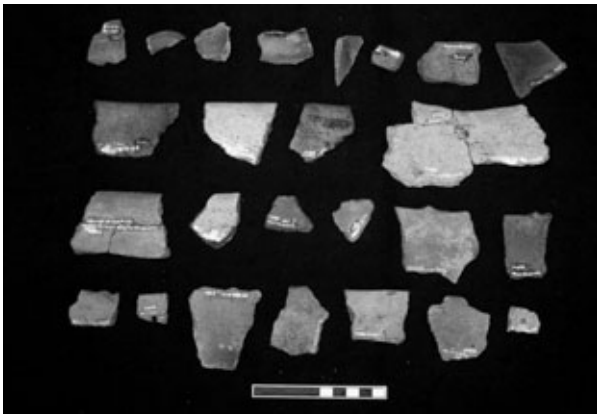
写真10　出土遺物

180


186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220




221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245



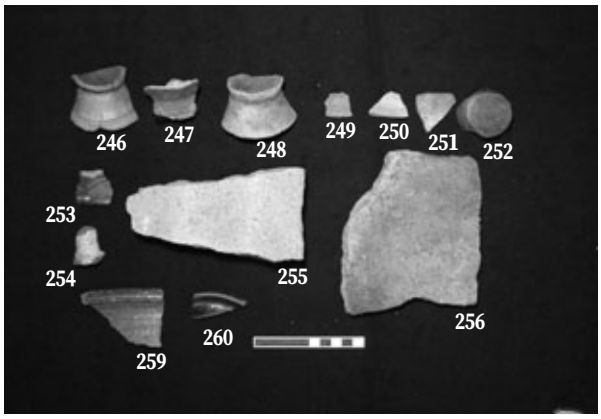
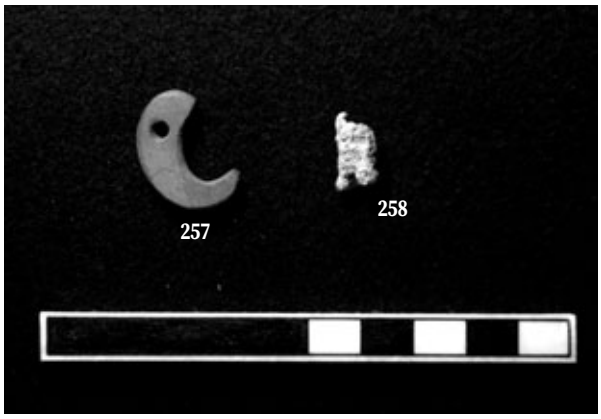
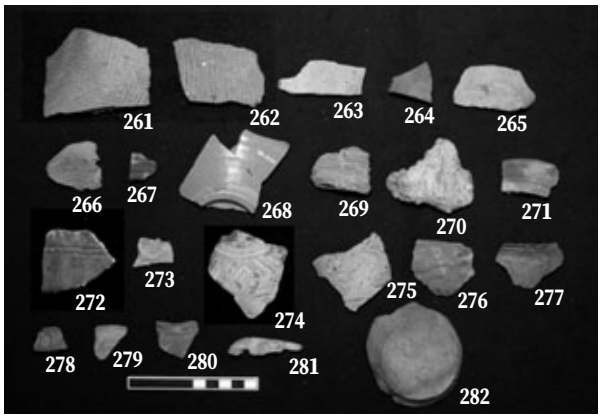
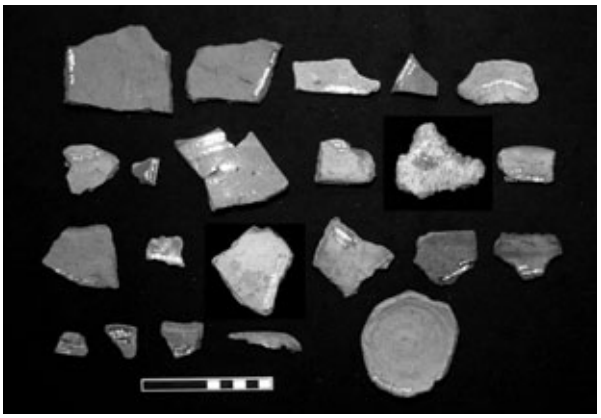
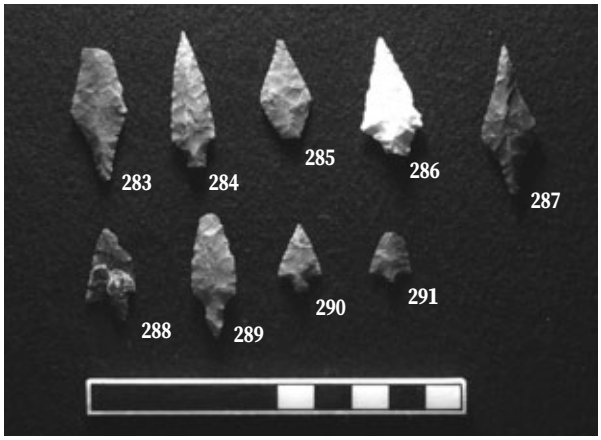

246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
259
260

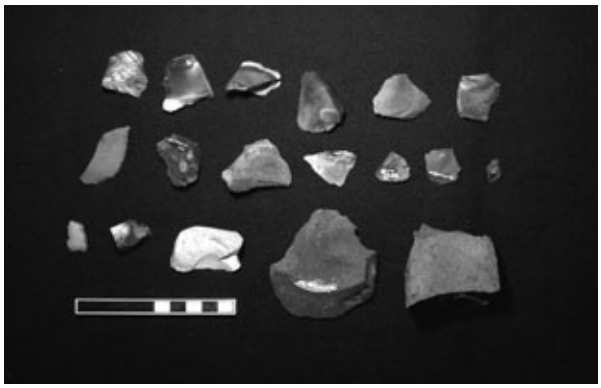
写真11　出土遺物

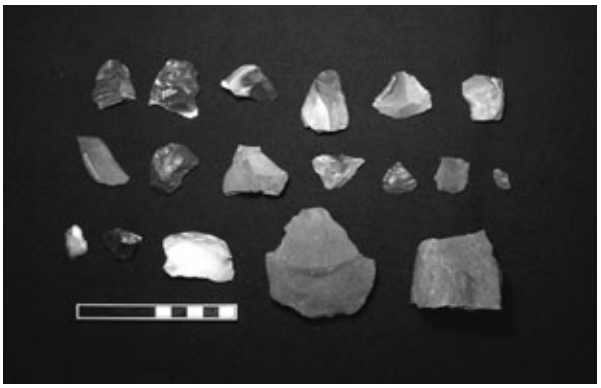












剥片石器

写真12　出土遺物

表１　A 区（L-10 区）北壁土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
Ⅰ	表土。黒色土（10YR2/1）に、橙色焼土（5YR7/6）を極小粒～薄い板状に 10%、炭化材を中粒～板状に 5% 含む	
1	黒色土（7.5YR2/1）に、黄褐色粘性土（10YR5/8）を極小～小粒状に７%、橙色焼土（5YR6/8）を極小粒状に 1%、炭化材を極小～小粒状に 1% 含む。しまり弱い	

表２　B 区（L-11 区）北壁土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
Ⅰ	表土。黒色土（10YR2/1）に、橙色焼土（5YR7/6）を極小粒～薄い板状に 10%、炭化材を中粒～板状に 5% 含む	
1	黒褐色土（7.5YR3/2）に、橙色粘性土（7.5YR6/6）を極小～大粒状に 1%、炭化材を極小粒状に 1% 含む。しまり強	
2	黒褐色土（7.5YR3/2）に、褐色焼土（10YR4/6）を薄い板状に 20%、炭化材を極小～薄い板状に 10% 含む。しまり弱	
3	黒褐色土（10YR2/3）に、にぶい黄橙色粘性土（10YR7/4）を中～大粒状に 3%、炭化材を極小粒状に 1%、直径３～７㎜大の礫を 2% 含む。しまり強	
4	黒褐色土（10YR3/1）に、炭化材を極小粒状に 1% 含む	

表３　C 区（L-12 区）南壁土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
Ⅰ	表土。黒色土（10YR2/1）に、橙色焼土（5YR7/6）を極小粒～薄い板状に 10%、炭化材を中粒～板状に 5% 含む	
1	黒褐色土（7.5YR3/2）に、橙色粘性土（7.5YR6/6）を極小～大粒状に 1%、炭化材を極小粒状に 1% 含む。しまり強	
2	暗褐色土（10YR3/3）に、炭化材を極小～小粒状に 5%、橙色粘性土（7.5YR6/6）を極小～大粒状に 2%、直径７～70㎜の礫を 1% 含む。ビニルを含む。しまり強	
3	灰黄褐色土（10YR4/2）に、橙色粘性土（7.5YR6/6）を極小粒状に 1%、直径 10 ～ 30 ㎜の礫を 10% 含む。ビニルを含む。しまり強	
4	黒褐色土（10YR2/3）に、にぶい黄橙色粘性土（10YR7/4）を中～大粒状に 3%、炭化材を極小粒状に 1%、直径３～７㎜大の礫を 2% 含む。しまり強	

表４　D 区（L-13 区）南壁土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
1	黒褐色土（7.5YR2/2）に、炭化材を極小粒状に 1%、直径 30 ～ 100 ㎝の礫を 2% 含む草根層。ビニル・鉄片を含む	

表５　E 区土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
Ⅰ	黒色土（7.5YR2/1）。ビニル等を含む草根層。しまり弱い	
1	黒色土（7.5YR2/1）に、黒褐色土（7.5YR3/1）を極小～小粒状に 10%、明黄褐色砂質土（10YR6/6）を極小粒状に 1% 含む	
2	明黄褐色砂質土（10YR6/6）。地山	

表６　SX-02 土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
Ⅰ	黒褐色土（10YR3/1）の草根層	
Ⅱ	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色土（10YR5/6）を極小～小粒状、及び板状に 3%、直径２～５㎜の礫を 1% 含む。しまり強い	
1	黒褐色土（10YR2/3）に、褐色土（10YR4/6）を大粒～中塊状に 10%、にぶい黄橙色土（10YR7/3）を大粒～小塊状に 5%、灰白色灰（10YR7/1）を小～中粒状に 1% 含む。しまり強い	
2	黒褐色土（10YR3/2）に、にぶい黄褐色土（10YR5/4）を中～大塊状に 40% 含む。灰白色灰（10YR7/1）を極小粒状に 1% 含む。しまり強い	
3	褐色土（10YR4/6）に、浅黄橙色パミス（10YR8/4）を大粒～小塊状に 1% 含む。しまり強い	

表７　SX-01 土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
Ⅰ	黒褐色土（10YR3/1）の草根層	
Ⅱ	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色土（10YR5/6）を極小～小粒状、及び板状に 3%、直径２～５㎜の礫を 1% 含む。しまり強い	
Ⅲ	黒褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色砂質土（10YR6/6）を極小～小粒状に 3%、炭化物を極小粒状に 1% 含む。しまり強い	SD-01?
1	黒褐色土（10YR2/3）に、黄褐色土（10YR5/6）を極小～大粒状に 2%、炭化物を小粒状に 1%、明黄褐色砂質土（10YR7/6）を極小粒状に 1% 含む	SX-01
2	黒褐色土（10YR3/2）に、黄橙色砂質土（10YR7/8）を極小～小粒状に 1%、炭化物を極小粒状に 1% 含む。しまり中	

表８　SX-03 土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小～大粒状に 15%、褐灰色シルト（10YR6/1）を極小粒状に 2%、炭化材を極小粒状に 1% 含む	SD-01
2	黒褐色土（7.5YR3/2）に、橙色砂質土（7.5YR6/8）を極小～中粒状に 15%、炭化材を極小粒状に 2%、褐灰色シルト（10YR6/1）を極小粒状に 1% 含む	SX-03

表９　SX-04 土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
1	暗褐色土（10YR3/3）に、黄褐色土（10YR5/6）を小粒～極大塊状に 30%、黒褐色土（10YR2/3）を極小粒状に 2%、直径５～10 ㎜の礫を 1% 含む。しまり中	

表 10　SX-08 南北ベルト土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
1	黒褐色土（10YR2/2）と褐色土（7.5YR4/6）との 5:5 の混層に、明黄褐色砂質土（10YR6/6）を極小粒～大塊状に 5% 含む。草根の混入が見られる。しまり強い	
2	黒褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色砂質土（10YR6/6）を極小粒状に 2%、褐色土（7.5YR4/6）を極小粒状に 2%、褐色土（7.5YR4/6）を極小粒状に 1% 含む	
3	褐色土（7.5YR4/6）のブロック	
4	黒褐色土（10YR2/3）に、明黄褐色砂質土（10YR6/6）を極小粒～中塊状に 3% 含む	
5	黒色土（10YR2/1）に、明黄褐色砂質土（10YR6/6）を極小～小粒状に 2% 含む	

表 11　K-19 区東西ベルト土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
I	草根層。黒褐色土（10YR2/2）に、にぶい赤褐色土（5YR5/4）を極小～小粒状、板状に 5%、炭化物を小～大粒状に 5%、褐色灰（5YR5/2）を極小～小粒状に 1% 含む。湿性なし	
1	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小～小粒状に 2%、炭化材を極小粒状に 1% 含む。しまり弱い	
2	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小～中粒状に 3%、にぶい黄褐色粘性土（10YR4/3）を極小～大粒状に 2% 含む。しまり有	SD-01
3	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒～中塊状に 10%、にぶい黄褐色粘性土（10YR4/3）を極小粒～中塊状に 7% 含む。崩壊土の可能性がある	
4	黒褐色土（10YR3/2）に、明褐色土（7.5YR5/6）を極小粒～大粒状に 40%、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小～小粒状に 2% 含む。しまり強い	

表 12　SD-01・SX-08 南北ベルト土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
1	暗褐色土（10YR3/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小～中粒状に 5%、炭化材を極小粒状に 1% 含む	
2	黒褐色土（10YR2/3）に、明黄褐色砂質土（10YR6/6）を極小～中粒状に 3%、炭化材を極小粒状に 1% 含む	
3	黒褐色土（10YR2/2）と褐色土（7.5YR4/6）との 5:5 の混層に明黄褐色砂質土（10YR6/6 ）を極小粒～大塊状に 5% 含む	SX-08
4	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小～小粒状に 2%、炭化材を極小粒状に 1% 含む	SD-01
5	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小粒～小塊状に 7%、褐色土（7.5YR4/4）を極小粒～中塊状に 10%、炭化材を極小粒状に 1% 含む	

表 13　K-20 区東西ベルト土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
1	暗褐色土（10YR3/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小～中粒状に 5%、炭化材を極小粒状に 1% 含む。草根が入り込む	
2	黒褐色土（10YR2/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小～中粒状に 2%、炭化材を極小粒状に 1% 含む	
3	暗褐色土（10YR3/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小粒～大塊状に 15%、炭化材を極小粒状に 2% 含む	SX-03/05
4	暗褐色土（10YR3/4）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小粒～大塊状に 7%、炭化材を極小粒状に 3% 含む	

表 14　SMP-02・SX-10 土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小～小粒状に 3%、炭化材を極小粒状に 1% 含む	SMP-02
2	黒色土（10YR2/1）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小～小粒状に 2%、炭化材を極小粒状に 1% 含む。しまり弱	
3	黒色土（10YR2/1）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を大粒～極大塊状に 30% 含む。炭化材を極小粒状に 1% 含む	
4	暗褐色土（10YR3/3）に、明褐色砂質土（7.5YR5/8）を極小～小粒状に 2%、炭化材を極小粒状に 1% 含む	SX-10

表 15　SMP-03・SX-11 土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
1	黒色土（10YR2/1）に、黄橙色砂質土（7.5YR7/8）を極小粒状に 2%、炭化材を極小～中粒状に 3% 含む	SMP-03
2	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小～大粒状に 5%、炭化材を極小粒状に 1% 含む	
3	黒褐色土（5YR2/1）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒状に 1%、炭化材を小粒状に 2% 含む	SX-11
4	黒褐色土（10YR3/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小～極大粒状に 10%、炭化材を極小～極大粒状に 2% 含む	
5	黒褐色土（5YR2/1）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒状に 1%、炭化材を小粒状に 2% 含む。しまり中	

表 16　Pit-03 土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
1	黒褐色土（10YR3/1）に、黄褐色粘性土（10YR5/8）を中粒～小塊状に 5% 含む。しまり中	

表 17　Pit-04 土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
1	黒褐色土（7.5YR2/2）に、明褐色砂質土（7.5YR5/8）を極小～中粒状に 7%、炭化材を極小～中粒状に 2% 含む	

表 18　SX-06 土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
1	暗褐色土（10YR3/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小～中粒状に 2%、炭化材を極小粒状に 1% 含む	
2	黄褐色砂質土（10YR5/6）に、暗褐色土（10YR2/2）を中～大塊状に 10% 含む	
3	暗褐色土（10YR3/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/3）を極小粒状に 3%、炭化材を極小粒状に 1% 含む	

表 19　SX-12 土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
1	黒色土（10YR2/1）に、明赤褐色焼土（5YR5/8）を極小～小粒状に 1%、黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～中塊状に 7%、炭化物を極小～小粒状に 1% 含む	

表 20　SX-13 土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、炭化材を極小～小粒状に 3% 含む。しまり弱	
2	黒褐色土（10YR2/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒～大塊状に 10%、炭化材を極小～小粒状に 2%、明赤褐色焼土（5YR5/8）を極小粒状に 1% 含む。しまり弱	

表 21　SX-17 土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小粒～大塊状に 7% 含む。しまり中	

表 22　K-22 区東西ベルト土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
Ⅰ	草根層。黒褐色土（10YR2/2）	
Ⅱ	黒褐色土（10YR3/1）に、褐色土（10YR4/6）を中～大粒状に 3% 含む。しまりなし	
1	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色土（10YR5/8）を小～大粒状に 2%、炭化材を小粒状に 1%、褐色土（5 YR6/8）を小粒状に 1% 含む。しまり強	
2	黒褐色土（10YR3/2）に、黄褐色土（10YR5/8）を極小粒状に 30%、明黄褐色粘性土（10YR6/8）を小塊状に 2% 含む	SX-23

表 23　SMP-04 土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色砂質土（10YR6/2）を極小～中粒状に 3%、炭化材を極小～小粒状に 2%、しまり弱い	
2	黒褐色土（7.5YR2/2）に、褐色焼土（7.5YR4/6）を極小粒～大塊状に 20%、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～中粒状に 5%、炭化材を極小粒状に 1% 含む	
3	暗褐色土（10YR3/3）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～小粒状に 15%、炭化材を極小粒状に 1% 含む	
4a	暗褐色土（10YR3/4）と褐色土（10YR4/6）との 6：4 の混層に、炭化材を極小粒状に 1% 含む	
4b	黄褐色土（10YR5/6）に暗褐色砂質土（10YR3/4）を小塊状に 10% 含む	
5	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色土（10YR5/6）を極小～中粒状に 10%、暗褐色砂（10YR3/4）を極小粒状に 5% 含む	

表 24　SMP-01・SX-09 土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、褐色土（10YR4/6）を極小～中粒状に 7%、炭化材を極小粒状に 1% 含む	SMP-01
2	暗褐色土（10YR3/4）に、明褐色砂質土（7.5YR5/6）を極小～大粒状に 25%、炭化材を極小粒状に 1% 含む	
3	黒褐色土（10YR3/2）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～小粒状に 7%、炭化材を極小粒状に 1% 含む	
4	黒褐色土（10YR2/2）に、橙色砂質土（7.5YR6/8）を極小～小粒状に 10%、炭化材を極小粒状に 1% 含む	SX-09

表 25　SX-31 土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、暗褐色土（10YR6/8）を極小粒状に 5%、明黄褐色土（10YR6/8）を極小～大粒状に 7 %、炭化材を極小粒状に 1 % 含む	

表 26　SX-32・33 土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
1	褐色土（10YR4/3）に、明黄褐色土（10YR6/6）を極小粒～中塊状に 7%、炭化材を極小～大粒状に 5% 含む	SX-33
2	黒褐色土（10YR2/3）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小粒～中塊状に 3%、明黄褐色土（10YR6/6）を極小～中粒状に 2%、炭化材を極小粒状に 1% 含む	SX-32
3	黒褐色土（10YR3/2）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小粒状に 3%、炭化材を極小粒状に 1% 含む	
4	にぶい黄褐色土（10YR4/3）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小粒～大塊状に 15%、明黄褐色土（10YR6/6）を極小粒～小塊状に 2%、にぶい黄褐色焼土（2.5YR4/4）を極小～大粒状に 2%、炭化材を極小～中粒状に 7% 含む	
5	暗褐色土（10YR3/3）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～大粒状に 5%、炭化材を極小粒状に 1% 含む	
6	褐色土（10YR4/4）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～小粒状に 7 %、炭化材を極小粒状に 1% 含む	

表 27　Pit-05 土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
1	黒褐色土（10YR3/1）に、明黄褐色土（10YR6/8）を極小～中粒状に 5%、炭化材を小～大塊状に 5%、橙色焼土（5YR5/6）を極小粒状に 1% 含む。しまり弱	

表 28　SMP-05 土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、黒褐色土（10YR5/8）を極小～小塊状に 5%、炭化材を極小粒状に 1% 含む	

表 29　SX-15a・b 土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
1	黒褐色土（10YR2/3）に、明黄褐色粘性土（10YR6/8）を小～中粒状に 5%、炭化材を極小～小粒状に 1% 含む	SX-15a
2	黒褐色土（10YR3/2）に、明黄褐色粘性土（10YR6/8）を極小粒～極大塊状に 30% 含む	
3	黒褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色粘性土（10YR6/8）を極小～小粒状に 2%、炭化物を極小～小粒状に 1% 含む。しまり強	SX-15b
4	黒褐色土（10YR3/2）に、明黄褐色粘性土（10YR6/8）を極小粒～極大塊状に 20%、炭化材を小～中粒状に 1%、灰黄褐色砂質土（10YR4/2）を極小粒状に 10% 含む。しまり強	

表 30　Pit-01・02 土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小粒～中塊状に 15% 含む。しまり中	Pit-01
2	黒色土（10YR2/1）に、黒褐色土（10YR3/2）を極小～小粒状に 7%、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小～小粒状に 3% 含む	
3	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小～小粒状に 10% 含む	Pit-02
4	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小～小粒状に 3% 含む	

表 31　Pit-07 土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
1	黒褐色土（7.5YR2/2）に、明褐色土（7.5YR5/8）を極小～大粒状に 3%、炭化材を極小粒状に 1% 含む	

表 32　SMP-06 土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
I	耕作土。黒褐色土（10YR2/3）	
1	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色土（10YR5/8）を極小～小粒状に 3%、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小粒状に 1%、炭化材を極小粒状に 1% 含む	
2	黒褐色土（10YR3/2）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～小粒状に 20%、炭化材を極小粒状に 1% 含む	
3	黒褐色土（10YR3/2）に、黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小粒状に 3%、炭化材を極小～小粒状に 3% 含む	
4	暗褐色土（10YR3/3）に、黄褐色土（10YR5/8）を極小粒～中塊状に 5%、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小粒状に 1%、炭化材を極小粒状に 1% 含む	

表 33　SX-14a・14b・Pit-06 土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小～大粒状に 2%、褐色土（10YR4/6）を極小～中粒状に 1%、炭化材を極小粒状に 1% 含む	
2	黒褐色土（10YR2/2）に、褐色土（10YR4/6）を極小粒～大塊状に 15%、黄褐色砂質土（10YR5/6）と炭化材をそれぞれ極小粒状に 1% 含む	
3	黒褐色土（10YR2/3）に、褐色土（10YR4/6）を極小粒～大塊状に 20%、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小～中粒状に 7%、炭化材を極小粒状に 2% 含む	
4	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小～大粒状に 5%、炭化材を極小粒状に 1% 含む	
5	褐色土（10YR4/4）に、黒褐色土（10YR2/2）を中塊状に 15%、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を中～大塊状に 25% 含む	
6	黒色土（10YR2/1）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒状に 1% 含む	
7	黒褐色土（10YR2/2）に、褐色土（10YR4/4）を極小～中粒状に 10% 含む	
8	黒褐色土（10YR2/3）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小粒状に 7%、褐色土（10YR4/4）を極小粒状に 1% 含む	
9	黒褐色土（10YR2/3）に、褐色土（10YR4/4）を極小～大粒状に 3%、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小～小粒状に 2%、炭化材を極小粒状に 1% 含む	
10	暗褐色土（10YR3/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小～中粒状に 10%、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小粒状に 1% 含む	
11	暗褐色土（10YR3/3）に、褐色土（10YR4/4）を極小粒～大塊状に 25%、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒～中塊状に 5%、炭化材を極小粒状に 1% 含む	
12	暗褐色土（10YR3/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小～中塊状に 30% 含む	
13	黒褐色土（10YR2/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小～中粒状に 15%、褐色土（10YR4/4）を極小粒状に 1% 含む	
14	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小～大粒状に 3%、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～小粒状に 1% 含む	Pit-06
15	暗褐色土（10YR3/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒～大塊状に 15%、褐色土（10YR4/4）を極小粒状に 2%、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小粒状に 1% 含む	

表 34　K-23 区東西ベルト土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
1	黒褐色土（10YR2/3）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小粒状に 1% 含む。草根の入り込みが著しく、農耕作の表土層となる	
2	黒褐色土（10YR2/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小粒状に 3%、炭化材を極小粒状に 1% 含む	
3	黒褐色土（10YR2/2）に、明褐色砂質土（7.5YR5/6）を極小粒～大塊状に 5%、炭化材を極小粒状に 1%、暗褐色土（10YR3/4）を小塊状に 2% 含む	
4	黒褐色土（10YR2/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小粒状に 1%、明褐色砂質土（7.5YR5/6）を極小粒状に 1%、炭化材を極小粒状に 1% 含む	
5	黒褐色土（10YR2/3）に、明黄褐色砂質土（7.5YR5/6）を極小粒状に 7%、明黄褐色砂質土（10YR6/6）を極小粒状に 2%、炭化材を極小粒状に 2% 含む	
6	暗褐色土（10YR3/4）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小粒～中塊状に 5%、炭化材を極小粒状に 1% 含む	
7	暗褐色土（10YR3/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小粒状に 3% 含む	
8	黒褐色土（10YR2/3）に、明褐色砂質土（7.5YR5/6）を極小粒～中塊状に 10%、明褐色砂質土（7.5YR5/6）を極小粒～小塊状に 3% 含む。しまり強	

表 35　SD-03 土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色土（10YR5/8）を極小～大粒状に 10%、炭化材を極小粒状に 1% 含む。しまり強	

表 36　SD-04 土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色土（10YR5/8）を極小～小粒状に 5%、暗褐色土（10YR3/3）を極小粒状に 3%、明赤褐色焼土（5YR5/8）を極小粒状に 1%、炭化材を極小粒状に 1% 含む。しまり中	

表 37　SX-30 土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色土（10YR6/8）を小～大塊状に 7%、暗褐色土（10YR3/3）を極小粒状に 5% 含む。しまり弱	

表 38　SX-36 土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
1	暗褐色土（10YR3/3）に、黄褐色土（10YR5/8）を極小～小粒状に 10%、黒色土（10YR2/1）を中粒状に 2%、炭化材を極小粒状に 1% 含む。しまりなし	

表 39　SD-05・06 土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
1	黒色土（10YR2/1）に、明黄褐色土（10YR6/8）を極小粒～小塊状に 7%、直径 5 ～ 20 ㎜の礫を 2%、炭化材を極小粒状に 1% 含む。しまり強	SD-05
2	黒色土（10YR2/1）に、明黄褐色土（10YR6/8）を極小～小粒状に 3%、暗褐色土（10YR3/4）を極小粒状に 2%、炭化材を極小粒状に 1% 含む。しまり弱	SD-06

表 40　K-25 区北側東西ベルト土層観察表

No.	土　層　注　記	備　考
I	草根層。黒褐色土（10YR2/2）	
1	黒褐色土（10YR2/2）に黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小～中粒状に 5%、褐色土（7.5YR4/3）を極小～中粒状に 2%、炭化物を極小粒状に 2% 含む	
2	黒褐色土（10YR3/2）に、褐色土（7.5YR4/3）を極小～大粒状に 30%、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒状に 1% 含む	
3	にぶい黄褐色土（10YR4/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小～大粒状に 15%、明褐色焼土（5YR5/8）を極小粒状に 1%、炭化材を極小粒状に 1% 含む	
4	黒色土（10YR1.7/1）　に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒状に 2%、炭化材を極小粒状に 2% 含む	SX-35
5	黒色土（7.5YR1.7/1）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒状に 2%、褐色土（7.5YR4/3）を極小粒状に 2% 含む	
6	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒～極大塊状に 35%、褐色土（7.5YR4/3）を極小粒状に 5%、炭化材を極小粒状に 1% 含む	

青森市埋蔵文化財調査報告書第89集

篠原遺跡発掘調査報告書

―県営本郷地区ふるさと農道緊急整備事業に係る緊急発掘調査報告 ―

発行年月日　平成18年3月24日

発　　行　青森市教育委員会浪岡教育事務所

〒038-1311青森県青森市浪岡大字浪岡字稲村101-1

TEL 0172-62-3004　FAX 0172-62-8166

印　　刷　第一印刷株式会社

〒038-0003　青森県青森市石江字江渡3-1

TEL 017-782-2333　FAX 017-781-9153